



911.3

18



10

IVD





俳諧袖珍抄文立邦

古經金默也輯

梅芭蕉譜

萬葉東籟玉さゝえ竹ハ山雀
の君とね牡丹を紅白せ是死
ほりて妻養ふけまつる翁哉、
生れよてはあきよもされ、
死はれよとの手ヲや極々氏
境コトノ十時考彦一本と成
桂風云色意のころアヤガム
きん兵株茎とまちの繁
茂りうきひて道をやまと先
輩う引導もかくもとつて
人呼て名記の名とす四友門
人とまたおとて家とうま格子
とうちてよくこれまでくまと
多くうれんあらぬひじきをち
かくのひ仰身えきてそめ成た
改玉破れんとすれ、かれやうだ
の海よ地をうてほづちうよ

人へてこの事のものもいひゆのかひがと
ふちくらぬのみおまてをうわき
まればさうもしままかねえひ
とうれいあつぬまよすやときよ旅
旅のむすよたすりんぐのと
旅をきはるの旅波一うこあくぬ
よきよま旅をこそとの東秋
とるうてあそびの老ゑす姿と
そくそくとス月のあがなと
ちむかみほひもさすとを
うくまめくのちまくらむじ
ヨガくらぶがはりとうえあめち
さうきめくのちまくらむじ
ちむかみほひもさすとを
うくまめくのちまくらむじ
ヨガくらぶがはりとうえあめち
やどくううよと姫ひづくとを
「南よむじうひは玉座て水樓
とめす地」不二口引いて紫門
京とす先てあめねり御にの
茅舎けむくと松の枝が戸
きみけ玉割れ木の枝が戸
やどくううよと姫ひづくとを
「南よむじうひは玉座て水樓
とめす地」不二口引いて紫門
京とす先てあめねり御にの
茅舎けむくと松の枝が戸

あたうちとうへくれハ初月の
タモリヤとひとひととく
ひ名月のとほひととくと
急食とうひと榮花とく
參とおほかとふくとす次
とけて風鳥の尾とくと
先着扇破れて風とく
せたあくとほくとくやれ
らに草ぬとりれとも奇
ひとにかの山中不材の族
木とたくて多性とくと
旅素ふりしと手とくと
め法模染ハ新葉とくんく
映字のちくとくとくとくと
其あくとくとくとくとくと
並びて風車やられあまと
あす

紫門辞
文部書
空手の歌
文部書
空手の歌
文部書

人くま東のあらわのからひが
ふちくみのみあまたをうわき
華れすとしもすあしねあへねあへ
とくにあつぬよすやときよが
森のむすよたすりんのと
え飛をきはの経はうこあくぬ
とくすまほすとをのま秋
とくすまほすとをのま秋
そくくとくとく三月のからをだ
ちまかのみほひもとさくすと
うくまかんこのちまかのむじ
ヨカツヒを飛ばうとえあみ
さうておき危わやさく之間の
葉をほむとくねのねひと
きまけお利お竹の枝お戸
やまくうとくねのねひと
トメ半よひひじよあつて水樓
とめ半よひひじよあつて水樓
京とすれどあめれの川はの
御とすれどあめれの川はの

山門ノ
紫門緑葉はあづけの
まきの秋がそぞろよまきと
其あづうととくに只ひうす
起じて即ちやうれまきと
おき

山門緑葉はあづけの
まきの秋がそぞろよまきと
其あづうととくに只ひうす
起じて即ちやうれまきと
おき

ひをきとく五月のゆめ原切
コトのれと情むすびそれと
てじとく子を能とたてて珍り
軍使ともすと、其繪とみ
因縁とせずす予くろみ
アリ向く珍ハ御のあくらのむ
御繪のあくらもとづく御繪
ほのキチや画のあくらと
ソク其すふよとニテ用と
あすと一かくやすとや思ふと
くみと解とづれば二つと
用とあすと感す(まつ)繪と
重てやうかどく(御繪)と
て序うするとあすとされとも
あう画を携け出で入る事
とゆよ其ふをあくらす
友遊をあれどく(御繪)と
尺をまよひて(御繪)と
ひて用(御繪)と(御繪)と
の絆のまかりうれ(御繪)

あああああたまをきとあ
あれああやめあや(後)あ
おとまゆ(物)もあくら(形)あ
そ(う)あ(う)あ(う)あ(う)
と(う)あ(う)あ(う)あ(う)
古(う)あ(う)あ(う)あ(う)
ま(う)あ(う)あ(う)あ(う)
よ(う)あ(う)あ(う)あ(う)
の(う)あ(う)あ(う)あ(う)
の(う)あ(う)あ(う)あ(う)

送終と辭

木石の宿とて(御)里とゆる人
森川もゆれたりすすりゆれ
う情ゆくと(う)う(う)う(う)
け子難(う)めと(う)めと(う)
美(う)めと(う)めと(う)めと(う)

やとせめて物の實をかどせ
ろこり今は皆おやけのあま
劍を構えぬみまづけのしう
の僕をもとせらひる事のく
ろお相おのもそといふよひう
アラムモキナヒルのをもすと
ほくくさん

枝吹よ子絆とうけて墨がうち
う名とゆゑすえ縁あさや

しのけめ縁ちた武の東
深川の子庵をひくと取

一坐とくわとおねは縁事よ
やまれきとく處ほのかみエニ

よあくわよとすごん人猶中の養

ひまくす一平のあくとすとすと
今ひくねはてとくに岩

かくらむのあくはうう孤
愁の峰難さうきちすとあ

クれりあくはく首とめくとひ
くよゑ又岸上とまんとひて

波とくもの
波の毛あくはくやだのを

金張説

子庵よひくまひて秋の
りきれく此のあくみ
平あくひめ祝う方をかくと
あく竹とうう井と割く

心せめて物の實を知る事
ろう今はおやけのあま
刺と獨りもみまえのくじ
の兼とよしめの事のく
ちがわのもすをハルヒシラ
アムミヤシヒ人のやまと
ハシマ

於の先のさむれはま
うき人北極もあくまうの電
行多あるるは決定する
すまにとて威ほのかみニシ
トモ

送行事吟詩

枝吹よ子鞋をうけて金城うち
よ名をゆくと見え猿あや
もひのくめ経ちた武の東
深川の字庵をひいて歌う
一歩をすむとおねば経常と
風騒をうな市と歌てまく

斗籠け御のまよかまくま
往點鶴那よ誇んとてがいをか
の轍よけくあらま車とす
生たる弓の弓と趣とくまくま
よかとよとよとくとく御中の義
のまよかとよとよとくとく義
ぐぐ今がうれすはとくとく義
かとよとよとよとくとく義
慈の喰難さうきらすとくとく義

金剛の事の如きとあらむ
うかくさればはとけよよ物と
そつれられし物とつくと
あらゆる所とて我をかまひ
上げて又がまへし物とて
まのとをと色とまへ一色
ますかくさんとを思ふせり
もとほとよアヤマツキ
なれせうもうちのうこゑ
へかきすよ候うめと高望
のあねひくくいせんが
おうきすうとあらみす
みそのうくくくんうゆ
もあらせきつてあらは
めのすみまうあはあさうき
元まうを嫌ゆるあはれで
絶え異そのむよ枝をやひん
あられよまうひ枝をやひん
けまうめくは枝をせす
無のまうめくは枝をせす

圓闡說

三毛ののみくじをうて
佛も正戒のものうて置くと
くどもさすくうて候うむ情
のあやういたゆふるあらがと
もあらうとくとくあれぬく
あの山の梅の下うよおまひの
みれぬひよ處て志のむれ等の
花事もさくとあくひのれあ
やすらぎうあらんわすす
れ波の秋う袖をはれてあま
里あさうとあらぬり
うれと老の身のりあとむす
り末殊のやうとすりとす

ハレハト
金剛の事の如きとあらむ
うかくさればはとけよよ物と
そつれられし物とつくと
あらゆる所とて我をかまひ
上げて又がまへし物とて
まのとをと色とまへ一色
ますかくさんとを思ふせり
もとほとよアヤマツキ
なれせうもうちのうこゑ
へかきすよ候うめと高望
のあねひくくいせんが
おうきすうとあらみす
みそのうくくくんうゆ
もあらせきつてあらは
めのすみまうあはあさうき
元まうを嫌ゆるあはれで
絶え異そのむよ枝をやひん
あられよまうひ枝をやひん
けまうめくは枝をせす
無のまうめくは枝をせす

し先てまの様と云ふすま
えけと云うてはゆ
ぬぐ人生六十とあれあうと
て身のこりうれうとをこりま
二十餘年かけ免の走れあれ
三十と一歳の差のとく三十
六十年の歎くふくうあま
しもくつまれて育てらるちよ
お起してゆかんのをあひ
とさのむすぶる直ひうものへ
思ふとおもいが懸掛長して
一轟すくみとひづられんま
あくまのこゑとまく事のす
うちと邊一傳説よがれて
生すとあくまんと南華老仙
の只利害と被却へ老若を
もすれて國すあんこうを
れぬくみとひづられんま
きいせ用の崩ゆりめて六他の

家業とまもくもじき教う
戸とすと桂那門と教んま
友あまと友とく美と高ちと
て三十年の歎くふくうあま
く禁戒とます

株拂親

の第の、おもうわのまことと爲
るく身とたくまわくとくにそ
ひも十すすといたのとくとそ
けやき井の辰次をモハ町の
化はなが保ひとておととあと
の人れ株とく併すとひもそく
うれおとく内きくとえて東の
一方を廢やよかひあつ大神と
さよかとうけて廻う性子の上原
の見つけのとやく重くありゆふを

一先てもの種と云ふ事と
云へば、三十歳の頃より
ぬぐく人を七十とすれあつて
て身のうづきとよもよも
二十歳までに先の老はれ
三十と一歳の老のとて五十歳
六十歳の老のとて六十歳
してくつまれて育様うら
れ起して、神は老のむすび
ととくのむすびと重ねたが
思ふと、おや、お怪せ長じて
一歳すくまでもかん足派のそ
うもとのことをとめて、身のそ

陽
太
極
天
地
生
萬
物
人
與
萬
物
一
體
萬
物
皆
有
體
萬
物
皆
有
形
萬
物
皆
有
性
萬
物
皆
有
靈

周易總義

陰
太
極
天
地
生
萬
物
人
與
萬
物
一
體
萬
物
皆
有
體
萬
物
皆
有
形
萬
物
皆
有
性
萬
物
皆
有
靈

周易總義

自序

周易總義

札記

周易總義

うへて、唐乾祐の貞となら
ぬされと云ひて一用とせんや又
二用とせんや

熟葉みゆ

元裕仲を芝善吉

社右範

人の縫とつあと妙う所がつれり
長き従じとふれ

経曰

まのづハ唐さす秋のゆ

瓢之鎧

山素半

一瓢寄巖山 自吸稱箕山

莫惜首陽餓 這中飯顛山

瓢公のかずほよせむかとくよも
阿はれ惠みうつす辭すとも

あくと赤いひよのゆきと
是をたぐみよつけむを今案

きとくとすれば大すてのゆよ
ほくはくえよつるを海

とまんとす被はるからくま
即河人曰手危のゆすま縫
入うるよまのあうとすとぞ達の
宿すれやそ用ひてはま素面
よをとれをえき一むせと
繋はす記すせる山とすやま
あくまきあくま山とすやま
飯巖山の先社のほどせすとぞ高
くあもあれの向ひてまめある
とすくつむあき財をきくとせん
義とあれらをめ一轍もま盡
とくとて餘山すうろくとぞ
先とあうり

わひのう瓢ひうろよまの素

極す

そがくこくのれゆよて橋町
とす行よ多義しむむ月き
さうだよあうぬ月桂すうや

毛すそつてねどとらんとされ
の風情獨申ときもひてわのち
らあくや風情の魔はるる
あと殺下して柄をさり豫て
うす白袖とたゞめて桜枝一
幹より命ともすまへえう
風情殺よこもとかづんとお

更科映捨月と詠

とく映捨の月とんとまう
あじれい月十五みの月と
立とまくは數すくれけれ
歌よかて考えよ手札すあま
よきうれし秋よ山のすくみ
ある山へひととま里も一
里をうる南と西あふ様
あくとすきやうきくもぢ
にかどくしよ黒ねどもと
す只氣源よ山のすくみ
ふくきがんのひととひけむ

ヒヨウ／＼もく／＼う／＼ゆ
お／＼お／＼走／＼走／＼人を擡
ら／＼と與／＼いと／＼庚／＼萬
けま／＼
お／＼けや映／＼屋の友
ひ／＼もすきと斜／＼歌の取

映舍人文

大和の木若尾の笛と琴を
さすりおれきく又／＼は山車
う／＼と御／＼とあ／＼すあ／＼
やあ／＼木すきとお／＼母の笛
／＼と木すきとお／＼笛す
ひ／＼をあ／＼木すの笛すけあ
を發直て若尾め／＼とお／＼笛
お／＼と／＼枝と玄石とせ
て／＼通葉のあ／＼もすきとお
あ／＼と／＼おとおとお母よつて
お／＼と／＼おとおとお母よつて

とアラヌヌあれあアリルヒ
考を書きた人をかこすとま
んひた

キーハヌヌヤ歎するもあれ

吊柳秋セリ雨星文

え縁みる有するの秋はやまをそ
うち白浪駆けの岸をひくと
鳥居も橋札をまつ一葉梶
と吹打をまき二星も星歌
さうしあふてこよひむだに
色さんもありおわひと一物をう
けそくわく遍路小町う引を
吹すゝ人ふこれよりて此ニモ
と拂うて雨星のこころをま
さめんとす 小ちうもあ
さあよけも旅のやうの上
通船うくる

セタヨガモアシモハ緋翁翁

松聲

雲竹撰

他の葉内を麻うもは僕也
阿久人ああこの方ともやあ
むけくはゆと画てこれも庚
きまとやされれい君ハ幸
手柄やう手ハ既又五十年
ちりしとあたま中にとく
若のかどりとゆくもす是
すくもすくもすくもすくも
す

こちくむけ新きものよ秋の音

松折贊

此様のそれとを付するのよ
うふうそめときをひひめて役
技業のあれとあれとあらう
きの山すらもすら玉の山の絆
う玷のかみあらそやむく
横幅うらうらとあらそ
人段上の風うらとあらそ

とひて今まがのとくもよ
よかくもよくひいた
をそくもよくひいた
の様づれど

峰はらのむく桂う梅の木う

とひて今まがのとくもよ
よかくもよくひいた
をそくもよくひいた
の様づれど

車挂駒小町輿

西家あとし義もよく
義もたすくつきの入が
アツシハ多く人うつし
めもす義のやうやう今うに
次すもくのうちあく翁があ
しゆもえうよんみのも
あふくわくもふと

清歌仙漫

仲豫は松山の岩をよみ
洞の林葉と雪とをもすが
さかす雪聲くよくもゆ
たどりやまとめと義と

のも玉をあく一坐識れひき本
ひよくあへやうよ吹て且人を
てほめ人をとく弟寢忍恥

ひよ勢くら毎の意味を
只これ大教自然の化若色甚は被
れても孤く

西上人贊

すそをくわいひのとがまを
きの海りをきふくつうの花
花のすりへうれそすれ
あうとまく

岩葉詩

全草と源とて教てもゆよ
さう士の志と文質と傳あくよ
すすも君子のいきげとすね食
筋筋と義と骨よして實と務

ト一志莊とあまくひよけん
喉と肺肝のうらやまほへむすと
ちももと十とを向すかとぎよ
やげことをはづなと解いて坐
因に生え實の花とまふとくと
お母と翁の種子をほりと
ていまとおははたとよまれるお
母のうよきぬり風をよせ
てそ手仲秋の二日内井重はの
彼の枕二月とまふとく種子
枝と奥女ゆきさくらばあま
くして跡よ息とくぬけと
せのあゆめや七十手の毎
廿七の娘のひよせ七十手の毎
三十手の娘のひよせ七十手の毎
枝がくさりとも悩すすま
養代ものれき松風よ吹素
これもまなの枝のひよせ
十手の娘のひよせ七十手の毎
枝すひよせ七十手の毎
枝すひよせ七十手の毎

心きくくれて無きよお母の
くみほくうれかげたまき
一きかまうへ坐つてひどく
親族のまうれよひくじつむ
舟もうりよ種子うむとどうて
手うおだよ年うかれよ病え
ますまうとどもま疾玉
のすれこくくうけよとまの
まとつて葉表とみつて枕
るを今月のあくとよくに
つけし付ひよすくぬまよ
かくてそんちとおのまくあ
らひすて父のまくのとく
のとくのとくのとくのとく
いあれむじよくの悲の殺
よもすわれておもじまめ
まもじとまとどりてぢめい
とのんとすれがオつれくと
くすれがオつれくと
くすれがオつれくと

もつゆのみ

松風よりされてかよ葉の枝

成秀うき上のねとほめ酒
ねぬうそとれぐまうり下枝
わらもの一丈が枝上さんとかま
其繁盛ことこすやうこゆ琴
をあやとりぬとよひはと起す
簫よせあよは枝よひ浪が絶
ととく當時牡丹をもする人
奔去とひつ先て他にほくす菊
と作もる人を小錦を吸て人
ヨシヨシよ木根相殺、金寧
とくして枝繁のかづらとまん
峰ねじりまほよあ四時
常聖すしてまのもまけ
きとよく樂天松下く齋
兼と仕友よ子業を経と立
人舟とどうともうめ心を慰
すすみよあは長生保善の

手歌をかでやうこ聲をあ

角

代金記

主は柳をよみやまに半身
かまうりうみて寒とひの着
とす御床のよみをまねの上
うむむをあひのまく
やうの裏うり役のまくちう
うれはまく膚よ追くちまく
あうとくされらんをやゑひ
一物とせんわふうりしや
せたうもあしたは士のひら
の裏とくとひ諸のもよひ
は後のかまくらぬまくもひ
みとくとくとひと出かまくも
さきとくとひと出かまくも
せ事の枕の上に二千甲の

もつみのみ

杜鵑はされてあくままで枝

成秀うき上のねとほの酒

松ゆうすとめぐらすう枝う

むもの一丈船枝上さんとがす

其繁森とこすやうこの參

をあやとりてとひ枝と起す

筆は似あはば枝とひ浪はれ

とく萬財牡丹とせする人

奇古とほつれて他とほとす

と能きる人を小舡を廢て人

よほすよす桜木相模ハモ寧

とえて枝繁のがちとひだ

峰松ひやうおほよみの四時

常雲すとてきのもむけり

きとよのう樂天曰松と舊

事とは友よ子繁と往と立

人目とよろともくめんを慰

すのみよほほ長生保養の

年

元禄四年仲秋日

残念記

玄を極ふよまやまに北紀う
かくもうつみて燕との悲傷
とす愁痕うよまうよまう

かの月とやと一通手の文
ふりかへんと、まわへん
きうしくて、とてて、宣きく
みそ宣かよあひ三百石の
喰飯と、とてて改めらる
くともみの、太極の筋、
と筋がせりひととつ、ま
の筋をやまとねられとま
ときどすものよせられぬ

力は鹿記

不ふのかく岩のしろす
山ゆくまうじとまそよ、
ふを寺の心とせよふとす
禁はほそまあれをさす
て、齋殿はたもと二也三百
おうとハ情盡きとすよ
卦體は、体能の是處とて
唯一のあうた基づひと成
あが生をやもけ利益の

豪とあがり、まよ又あひに
りたゞ人の猪さうりれへて、
まの猪さうかくもとす
み野、そのアサツ、通相葉
とかまをねり、聖高と孤
裡うとをそう約経院とす
ゆうの傍はう、と萬士高
も其輩はの通文、もんぢ
と今ハとせうりむうと、
すまうの經考人の名とみゆを
アサツと中をすと十と
はうりやで、とまやうちよ
身とみの虫のものと、あひ
鶴生あととあれて、與のあ治
ひ、と考き、ゆのほく、
鶴と被りて、とめの壁、
たよよの厚葉のまづれと
あまく、片端をよびた

かの月とやと一通書の委
ふりへんまへるかへん
きうへんとまで書きて
みく官やくわひ三百紙の
發解ととくに改めらる
くともみのほ大極の廢止
も解せばひとつ下す事無
の懲とやすとめられとあ
ときよものゆせられぬ

内使院記

ふふのむく岩すのうじろ

徳よかひてもす一せのす
すももおもひかれ里山
よち人とかきかさすやう極
えう峰鷲鷹と山あう春
の里ひづくろう巣つゝゆ
ろちようとくみけんも紫葉
の雲のかくらすみれをくま
あくさんとくしろのゆふ
主翁徐伦虎庵ともゆく
只雅辟山民とありて辰朝
ノ足と投却一矢山の風と
ねの時た若の風あざほてう
うう狀くととの事すまひ
て一處のそもくとうは
と苦仕けん人の跡よむく

卷下
徳よかひてもす一せのす
すももおもひかれ里山
よち人とかきかさすやう極
えう峰鷲鷹と山あう春
の里ひづくろう巣つゝゆ
ろちようとくみけんも紫葉
の雲のかくらすみれをくま
あくさんとくしろのゆふ
主翁徐伦虎庵ともゆく
只雅辟山民とありて辰朝
ノ足と投却一矢山の風と
ねの時た若の風あざほてう
うう狀くととの事すまひ
て一處のそもくとうは
と苦仕けん人の跡よむく

経が一ゆきあくみ直すも
きもが一件の方を詠てよ
この物をもむまかねどん
あまつてうさと筑紫の良
山の傍らにか哉ひ甲斐船也
う嚴子とも此の波より
のまとうたとくらま人よと
歌と色いと歌と音と酒と
幻住院の二事とぞうしや
そそだの記念とあくねす
車と山車とお轎ねどひま
景あくまよとあくまの
核笠越の若き暮けう秋の上
れねよけう草をすれと
ゆすくじふとうか一葉
まちの御里のとめこととて事
てゐのあられ橋とひゆじえ
の草とくけよがすよねとあま
くぬ農耕日既に山のとよ
うれい歌は静と月とまち
うれい歌は静と月とまち

てのれととあひ焼と東と西
西と東歌ととすかくつととく
ゆくよすと山歌と詠
くさんとよめくらむあまくら
てきとよめくらむくら
きのうづくつとれよの舟
とおよすよめくはな運命の船
うやまとひハ伊勢相模の船
よひよひよひよひよひよひよ
身とせあむよひよひよひよ
まくとくはな運命の船とくら
もとへ船よせ船よせうとくら
すらうづくつとれよの舟の舟
よひよひよひよひよひよひよ
質のひよひよひよひよひよひ
せすみよひよひよひよひよ
うね

ああむ村の木はうな木

経が一也であることを喜んで
きもかくお佛の心をあらわすよ
うの物をまもつておおどひと
うとうとうと氣を荒業する良
山の信重が哉は甲斐信也
う嚴子も此の後より
いそぞうとゆきをあらわすと
就と色と安ととまと與て
幻信院の二事とおもふや
えもそ院の記念とおもむす
てて山居とおれどひき
景もくもよておれ本寺の
移築越の苦難はうれし上
れむうけりとすとが一興
をすの御里のとみこととす
てゐるあれ福くひゆじん
のとくけよがよむとあま
くぬ農作日既に山のとよ
うれの秋は静と風とすら

山を静うて性をやまひ水
の動て情とあくとも静かの
方へて住みたまひのうり
候田や路文とりの日は住居を
萬に風が吹と雪を圍り成
すすきと雪とゆきと雪と風の
やまと門と城門と門とくら
あの門内と外とをゆきだと
まうかの家船もまよすゆ
されがと一昔くとてあり
且それもすとすと丈の
二弓体佔二子の尾とつまでも
うもそつとすと木と植石と
あくでかられどもあれどもす
ももこれもの、ゆくが西面
嶮と古穿の通せとくいぬを
抱て、上山、むづぬ、壁の
がもう、仰れられねのひき
波とあふひるの山ひの
きぬとあくえよとて、意

石山と肩の高さとあんをも
おもひたと變じて、て、続
山と月とまよは松樹はの
日とれかとれすとくに、の
ぬきも又とれすとくに、の
思ふたと吹くとびの弱

十八櫻丸

美の、まある、門は、と、あ
ゆあくと、變じて、と、ゆ
いあくと、うと、れ、山
方、ゆかめうて、と、く、金
く、れ、田、の、ま、枝、の、ゆ
よ、と、れ、岸、の、民、あ、
竹、の、ま、み、の、ゆ、も、ゆ、曝
布、と、う、し、う、り、と、え、て、す、
う、と、舟、う、ふ、里、人、の、ゆ、
う、と、じ、不、局、と、ま、お、
う、と、も、只、此、橋、と、ま、く

まよひせうれしまえ
りもとすまはうへの教
もむかしてほむすや
さからひのしきをまちく
す様のゆきよ教めすが
すとくまよすま記あらう
しかの漏はのへまをめ
の牛の塊も津ゆ一休のゆうが
もひとてあらまじ橋と名を
いもんとかハハ八橋ともいそ
やくわく

山あら山下山の山の山

嵯峨日記

え鷹平未外月十八日嵯峨
並ひもするう度稀金より
ん北とすてまをすと
東工海とすハ行吉とく
どもとよとくは子は

くう序引あらう今申の序
隅つるあく不伏あとまみ
れ一祝 文彦 白氏文集
かね更人一首 立繪物語
源光わ津 去作見 桂葉
と置たの行徳安の五重の
巻よさもこの事よすりと
個一巻至すとくう秋のす
や酒樂のねよすよすよす
てまくしりく家實勝を
なれては閑とすみ
十五日午時門まで宿つ大井
川あらすまう井と井ふすま
ねは尾の里とほけとすま
よほく人ゆよひお座すね尾
林の申よ小蟬ゆとまとすま
すて上下の嵯峨と竹の山
きうくよしんかの仲よしと
えよきよしと翁と翁の孫と
翁の孫と翁の孫と

ヨドミトキモヤ草ハシホウの隣
巻のやよけうもアツス様を植
えりがこくも強拂石後之上
よ起立て拂は巻中の巻井
とあれり昭君村の桙亞女廟
の花代モアトモアモヒヤム
アタマヤ竹のまごめ人の巻
岩山巻が志げアヤメの巻
斜リよびて巻拂キヨカルハ
京よりあらすま東京ニゆ
霄より附

廿日小暖暎のあらんと鮑紅

尼あらすま東京の吟どを

停る

はみゆよ子供のよ思ひ裏高
道神今ハむうれほの
船かすにてよまて散役す
あらじよ作りみうれさう

のさよりも今のほれか
えきうりよとされ船を一線

重玉望もは一被乳草もめど
寄石懐ねも草の下トカくれる
竹様のあよ袖の木一木と花か
けアヌ

袖の木やわうあのもん神だる
ほどまな大休敷とも月取

すやこんちとあら暖暎の山

す木の方すり草すす御葉の裏

あら船で雪ハ羽紅支船をどう
めては至一張よそくそそく附れ

は秋もひようくてねよさく
うつむかと起きて屋の草す

みれどえぞて窓ちつよまて歌
すすすす手のゑん北う東よ歸

すよ一張の歌底よ四木の木
すよおもよと四木とて草すよ又

かくとお控へるのれどおと
京よゆすす来れどよも

せ一日歌歌の森うけもどむ

主あくべー又アモ

山里ニニモナシ詩トトモ

ひきうすやんと思ひうまのと

鶴すむほとかすくも川前を嘯

源士の白毫のせりの用とゆめ

主ハ半日のみとくしもと素半

はと繋を常ニ詫まれむ予も又

うきぬとさかうりとさかへも

ととさかうまよ宿居しとひに包

まち方を參まう消息すしあれ武

にようゆゆゆゆとて開友門人の清

息とすりあまことくとくキ坐わ

狀工手う徑徑へ色意の田経と

君を宗殿はあくべー

むくう往小褐ゆくひとる家

又云

赤経とアラミア枝ニ丈もううに

して樹一本外ハ真木色と

アベとちく

コラ根葉色コヨアヒヒココロ

あくをのけきもせりよ
船もおもひうるれしかう
れで舟は残りゆきうまうて
す東京より水むねく色す
宣肺されり水むねく色す
にむねだつておほきくみえがと
見ゆてもあくもくはます
せ二日わのち雨降るがと
くさびきすたせじとと
起ふせり
妻はおもへぬととを
海を飲むのととを
とくと
燕は宿すものと然と
とくと
流鶯は宿すものと流れて
とまとす
さあさわへうのとと
西上人のよみかげはまくと
とくと
燕は宿すものと然と
とくと
流鶯は宿すものと流れて
とまとす
さあさわへうのとと
西上人のよみかげはまくと
とくと
主あくや又と
山里はこゑすと達ととと
ひくすとんと思ひよまと
翁すむはとかくうましむと嘯
哲士の曰くはは日の向をむき
主はまのの家とととあすと素半
ばと繫を常とめられむと文
うきかときくとさかへき
とまゆる寺は福居とひのき
言おまえより消息すしの我
にすくゆ候とて廟文の入の
息とおゆまことくとおゆま
状と手の経緯と色差の因縁と
君を宗限とあど
むすり往小福居ひとを尋
又云
あれとアロウ枚ニ丈もうに
して帆一竿外ハ高木よ色と
くとととと

あくべのけきもぬりよせ
船うちおこまうあれくわとう
れて船は波う波ううきよとて
すまえよぬうと歌ひゆむく
音附れの歌わぬきぬす
にかねるもとおれうみねがと
ぬくともあくまくは思す
せ二日ねあら雨あらひふく
くさひきすれむどかして
起ふ其詞

嵐をとうす

豹者之靈よえうらうくふ
き代やまかねびとおわくえ

廿三日

身とすく木魂よゆるの月
刻の歌や木魂よゆるの月の音
笛やもとあはゆの絃のすゑ
麦の絃や弦よゆるて鳴る夜
一月のまほくみでひのち
廿四日 駿鹿柿守

至植の柿も本近寺も名まく
唐とてす東京もすまし
行昌院より消息大はの高白
もう消息あり元兆東の空軍
福の浦ふ事海ん兆東の空軍
廿五日 子殿太はゆ史邦

文草さん訪

歌麿柿守

浮對喙峰伴鳥魚

軒荒衣似野人居
枝改今欠赤丸卵
青葉く既堪學書

房小督嘆

強挽怒情生涼亭
一輪秋月野村聞
昔季僅ぬ秋琴韵
仍空孤墳竹樹中
英かりう二葉う根の葉

連中の心

ほくきんあくや枝も梅さう

美山苦く感句

杜門貢向陳無已

對玄抨毫秦少游
江州來りて武にの歌并福天
かの他社一毛貫中ノ

本居の言葉入るすをも
印井峰ともよがへれど其角
鷹の貴く歌ひす月

旅館の宿へもとまると

廿四日 駿齋柿家

至植の納む本院也も名をふ

名とてす東京もする猿

利昌庵より消息大はの高白

より消息あら兆東の雲界

獨り神事重徳ん兆東の通

廿五日子殿太はゆ史邦

文草々訪

駿齋柿家

源對峰峰伴鳥魚

軒荒夷似野人居
枝改今欠赤丸卵
青葉く改堪學書

弓小督娘

強挽愁情出深言
一輪秋月野村風
昔季僅ぬ琴琴韵
何支孤墳竹樹中
英かう二葉う根の蔓草

連中の心

ほくさんあや枝。梅こう

美心苦く感句

杜門貢向陳無已

對言抨鳴秦少游

ひ川來りて武にの歌并頌

うの歌附一毛貫中

宋俗の音楽の音と音

印井峰とよがーと毛貫中

鷹の音こねりすと音

嵐やとううす

物事の盡よえううううう
も代やむきねはうわりくれ

廿三日

もとす木魂よゆるえの月
えの歌や木魂よゆるや歌のう
算やもとすよゆの絵のすみ
麦の絵や歌よゆるて帰る夜
一月の麦の歌よゆるてもとすよ
舞歌の歌よゆるてもとすよ

廿四日 駿齋柿本

室植の柿も本近野も冬をよぶ

元兆

字のいとよかをかりて
つづりやみてゆるす世忍
中の引うちより雷運電降る
龍をどもて雷運電降る
かく極のとくちひよふ常樂
のとく

廿六日

萬葉トテ無事の秋の電章
とくの雲ヨウシテ人蓋
ガリムキナヒアシ角アリテ人蓋
人のくむうち羽根アリケル蓋
スムニ枝を折のれやん川
せせ日人來くは波は川
せ日差ニ枝葉アリトヒ御
て清流にて是の水すすめ
ノ原ハ夏とすすは流すて火あ
め陽がとうて水と夏も
飛毛髪とすむ時日也す
久ミ葉を落す時日也す
ノ原ハ夏とすすは流すて火あ
め陽がとうて水と夏も
飛毛髪とすむ時日也す
久ミ葉を落す時日也す
蓋ニモツテ腰枕記ニ撲安

雲在國う據えまくはれてぬ成
つゝさするをいに聖人思ふ乃
差フ何へ此終は高想益意の
立意取法トヌ又あうすそれ
はては我をうそうひとあく念
意の我を志深く停ぬ單
中でもひ來つて夜く床と
仰く起つり仰の聲とす
けと百よりはと新のとく往復
事時の聲と其志つらひ裏不
渡てつすととあけとへあ
ヘトテすととあけとへあ
せかは星を東かき被の聲を
内

宇鉛聳天星似宵
衣川通海月めら
莫地の山家歌ふけ古今言
今他時へ音符を余

廿日 残

字のひ安^ヒと處^スをかりて
つづきをえてゆうす世忍
申の別^ハつづり雷^{テウ}電^{デン}降^フ
詔^ミをとくに對^シ電^{デン}降^フとあらわし
か^ハ極^シのとくちとくと筆^{シテ}來^リ
のとく

廿六日

萬^ハとくに禦^ミとまけ^ハ極^シの筆^{シテ}來^リ
とくけの筆^{シテ}とまけ^ハ未^タ萬^ハ
始^ハとみかけ^ハとまけ^ハ未^タ來^リ
人のくむうち物^{モノ}難^ハとす筆^{シテ}

卷之二

御書院

御書院の御書院の御書院の御書院

御書院の御書院の御書院の御書院

御書院

御書院の御書院の御書院

二八

御書院の御書院の御書院の御書院

に川平田の風寺李由祐と高白牛
歌と消息

竹のまやしとあらわのうりれああああ
此ううの肌寒さうく御月が當
そを吹

すみつゝきぬわちひし舞櫻

二日

曾良來リ、芳賀の花とるよ然
那と猪竹と、武に四支の今
樂かれされむすと達す

熊壁傍やうみて入い立の處
大鳴やうくおれくとせの果

かく上人の御教を詔あ焉て
を坐めかへて安直へるや

ことならぬ人の方と黄へ上人
の本教へてうまむが、かくも無
く候りて候むが、かくも無

石基はぬう木倚も
丈を仰きあつてふた上

躬の身をすく綱てさき商角機
羽のあよ高だ

躬の身をすく綱てさき商角機
羽のあよ高だ

白婆吟

あともも又月の玉すくは武陵
うち古里はゆき二十日程の月
日も差あれや小半の月をすむ
あつれとくをもむかむくと
あらじうねともむくと三の

もうともかの葉もく眉
もくきてほりかねのくらうす
のみひもくとの葉もく見え
の玉貨をやくみてゆの白婆とあ
よ酒へやすみれ玉すくはく眉す
やわくとくとくのあくくが
みはづつ

むくとくとくのあくくの書
むくとくとくのあくくの書

叢書

代のがさよんてもすまばまれ
うよかのよもく竹もくよも
くもくけりのわくゆとくと
ゆくよくつけとくものあくじ
おやすにとくのあくのあく
くよくよく竹もくとくとく
ゆくよくよく竹もくとくとく
きとくとくのあくとくとくの
まゆゆのひ中とくとくとく父母
のいとくとくとくとくとくとく

ちうともかの聲もちく眉
ままでほのかにのらはつた
のみひきの葉もれよ見
の葉袋をもとてゆつ白髪とあ
よ浦へすすればみ葉吹く眉す
やあかうとめのあくらが
みほづ

むふと入浦へ浦そひき秋の音

葉音

代のがさよへむ古事記され
さよかのよもやく竹林へあ
をきけえのむか山とぞて
何のよつけても嘗のあじ
おやじにまくのうのあまく歌
うすまで竹もア人扱うく
和やれおのうちもくくくう
きとかきのよねとてて山も
ま修跡のふ中は山へ父父母
のよきかくをひき葉吹のむ

ゆく上人の御前を立ちあすまう
おまきのかこもへた安直へまうや
そとに立らば人の勞と費へよし
のまわらじうふあひをひりか
く候う焉て度むれむかへ
石基うぬうふ侍を

丈立のゆゑをあつてふれ上

勝也後子跡

うへもくへ思ふのを何生
くかとて

古事記 脇の筋に通すのを

小姓危賊

三十歳やから不才の若様の
お本とありて福生のかくと
うりぬひみの本めのとぞまれ
てりあるがゆゑをかくとぞまよ
かの家禮とおこことおなまよ
は山の被とぬれ物若者を傳
外の候毛とえそらをあと
アやんやとあまくとぞまよ
立候と向むきまほうと云
ものあひゆづれと袖をひ
きえむよじゆきと象腰とよ
あわせばのすくもくとぞ
アやんやとあまくとぞまよ
あまくとぞまよくとぞまよ

傳のやう承よさひすと被てさ
傳のほとくとあくよびの葉
のあづれとくさる下芦の一繁
れやくと赤くまろと幻住だ
とくまふと風ふとくとくとくと
やうのとくとくとくとくとくと
らうかの行持等のアハ勇士
若はとも水みの宿又かう人の
はせといとひ一語とくやうハと
ときくの事よりて構はま
アのちすよあさうとくと
おもせはせむれてのーま
ト伸てせんれん走のとく
ひさすふ床うし人あくまほ
とくらでモ石ふとあくら
岩す山のまくとくとくと
くく峰とうかうとくとくと
あとひてて涼しきれし夕月

かくも

古事記の臍の筋、眞理の心

幻経鹿賦

卒十日やちふる者、若様の
先本とかりて福坐のかくと
うしめひみの坐れどもそれ
でやあもよひゆきとおうよ
かの家禮うわことおうよ
結因う政治の儀とおうよ
松鳥白鷺と画と耳一箇者
は山と被とめくわむ若鶴と
外の候をすうえうよ
ゑやうんやうとあきうよ
立候と向うもきくよ
あるゑあひうと袖を
まくるよじくとおうよ
あうちがほの方、おもひくさ
きをうめふはくとくよ

奥の山と底よきひすと被てう
御もく肩とくとあくよけの葉
のあづれとくとまつ小芦の一葉
ねやくとおうとくとひだた
とくとくとくとくとくとくとく
やうのうとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
らうかのほぢるのうへい勇士
若はれもれ水のぬりえがる人の
はせとくとくとくとくとくとく
とくとくのうへくとくとくとく
うのうのうへくとくとくとくとく
かえんまほもれとわのーま
コヨヘとせんぬれとわのーま
うへくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
岩の山のうへくとくとくとく
うへくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく

うしもせく魚の身にあ
るゆゑ

吉子や膳の孫一派のもの

久松毛賀

三十金をうち不才の若様の
お本とありて福井のかゝる
うしもせく魚の身にあるもの
てりあるよ。今やうへやまよ
かの家が禮うむことわざを述

のちあめあれは後へ吸あう山
石も一せきとしるる所と
右う多めたすきへゆきよ本承
のつくとむかうへきをあま
ひうちきかとひくもあま
そろえのて兵楚東の
ああよ船はにじにじにじ
けよやぶえのひは良のす根よ
そがう峰のれいをひそめて猿
所の猿は木るさくやき勢の
橋はれて蘿はねるコテ
りをあすこ上山ハ不二の傳は
よじてむさー歌のたますさよ
廻ひかく廻四上山コ古人とま
ふくて惡はの里人のきやうる
マけんねこ眠るくよあらん
としろの峰コシの峰うねの
柵竹うき木の名せと並てこれと

猿の猿うけと名づく猿へきぬ除
先う蘿葉菜の飲樂も市コ在て
かすひすく正を人を正峰
の経ひもえと経てうやむう
に名すすすすすすすすすす
き度旅と風とひゆうてすすた
すく心すとやうあつ時へ朝と旅
の旅とすとむすと山茶ひとり
茶のみどりとすとくのや
とひと一體のとあくと旅く
おとせきも人もまくうとてあ
くゆもおげねすとむの
お佛の方とるくとくとくのや
かくとくとくとくとくのや
らくとくとくとくとくのや
とくとくとくとくとくのや
とくとくとくとくとくのや
其處うへすうをとまくほさん
アモカ經院の二字とかく
人のがくともあれとわう山度と

ひの旅ねどりひきとまがくよ
あくともゆじほ本るの様を超越
の音えのほう枕の上の枕玉み
さりひもたやもすのみ林の里人
即と今あつて枕の端をひゆし
兎の豆ぬくがよがくかせうら
ぬもあくヨロとまく一日がまく
紡ぐも秋生まくうつて教と
ともれひ周兩とあくと毛並成
こうじ物とくとえひくふくよ不
幸とこうと山峰と山とがくえん
トもゆにあがて人よけうわくや
はすもゆきとほとほとえん
べくわくよ時よりととあるとす
けきりむと青はくは庭のえ
がくとくふれハ強エヒ一筋
つかれて毛絨モオと歯モ空
考してひあくおつうれ肩
と青はくと秋もびよきゆくま

松島賦

御京れ享の變化とすが其の
すまひやくはとやうとひ文とと
先て立まつぬ

山東の季節の變化とその食事の
すゝみがよしとやうてひえとと
先て立さうぬ

松島賦

松とすすまねと松島を授業
キ一の弓馬弓と元祖を西船を
駆け走るもくはとてはの里三
里術にの歎とくふ七十二峰あ
百のまきと教すのまえをのむき
伏木の波よそもまのまハ二重
巻きの二重よなみくちまき
えれぞうくめの負ふゆき抱る
ひくえねをすまうとく内す
こゑふことうひぬうかうま
す一筋流石にまを屏風
芭翁のまほよの小舟こようれ
てまきのまきのまかくまかく
まかくもとまけんせをめぐ
まのね山を昔とあつてねのひ

ひ旅ねどひひきとまめあま
あまもゆくは本るの桂を差越
の音えはうれの上のむすみ
うちひよきやさの森林の里人
ゆき全あつて精の端をひゆく
兎の豆網ハシモかよせよかせよら
ぬまよくよとよまよくよまよく
紡ぐも取せよまよくよて紡ぐ
ともわい周兩スルおとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよ
よとよとよとよとよとよとよとよ

よしと云ときつてかざかまく松
とあふすれりのあむねがま
那のとくと松一壁の玉川
仲のたま博ゆのそだまくよ
のねねひきうひよふとあくた
こうむらやみれ浦よをはる
のめ神ゆり神ものうが壁を
文磨ニキ泉ニ市立退とせ
於あう壁へ地づきうそぞ壁
山のあきの松よ壁を瑞岩
ちの木壁ち時松へとの達立
あち二十二世のむうしま聖
四叶の御子入鹿場おのほ
ひすく段停壁政宗再無
て七事他壁とすふりけは筆
ちを海岸玉時走松みけをひと
し花蘇波よりくねのまう
草やうね壁はゆきまくわ
四葉の御子入鹿場おのほ
ひすく段停壁政宗再無
て七事他壁とすふりけは筆
とく其まきく宿燕とて集

人の歌と歌ふよやかよ秋のも
う大いすくのあきの葉ふる遠
化の大工つれのく葉とあるひ
詞とすまむ

月又歌

とく其意ゆの月又歌とすま
らく本もすきよ松ゆりと松所松
かのぐくと壁すよしづの壁と
うきうて泉川よ二りのふとつ
ふとくハ葉とつるに葉二歌
の義とえすとよひの葉とよ壁
ともかくれんか二派よされ
西半を吹かすまとす葉す
玉川う泉と流す文子の月よ
そよよて其海よ葉えくとを
すよ考へきくあくを老ぬ
智舟へねのえあくうつきの
ゆきあくうひあくうされ
かくも煙蒸はゆの海よかく

き葉の風華ややじらむぞま
あふれにててこにニ子若の恋を
しめさんやすしてさかのをと
する今が歌く津とのうろこと
あがくはすて歌中へ仙の遊ひま
らんやまとやづれしかばめくま
とくちのぬええひらぐる月と
の花あわせと思ひやすれどもだ
こほれのかの月ねどまをさう
かくと三重の興よ寄りてゆみの
月と舟とうさんどものこゑ入
るふれやとおどりとまはる葉
れ舟とあけれども船と葉瓶
のまき男のれい赤壁の舟のも
しまくまひくさたりとてあや
おやの底の名うへまのまねび
ね舟とあけれども船と葉瓶
ともかくつるくしろよきわの

峰もくる山の峰の歌はのね
さんてまくす桜橋のあもせめん
夫橋の橋帆をこうひともとをま
せまく

舟やゆくとよせ小町
まれへあわの雲式歌のふる原やう
付とくすやまの森居六西壁
哉女のがひとめよつれむれの物の
名よあでうのすもうくよほさん
や室さむかほの名蹕あうけい
さくねやと舟ときよとて森居
様子とくとくとくとくとくとくとく
のふと階すとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
ねにの舞はとよひあとよれとく
かとくとくとくとくとくとくとくとく
わくとくとくとくとくとくとくとく
うとくとくとくとくとくとくとくとく
ぬれの歌とよとくとくとくとく

二井寺の門へとさうやるの月

すとよ鼓のむらめく舟

じのまひとおもへばゆ韓

金文ますよほきし車賈

詩稿ともとよぬ金訪今書

ことかうもひもはもと赤碧れ

あはりよもき地くをかわす

夜あやとくぬもくとくわす

とうてくす方の風ふとくま

往に月を長等山の木す

入ぬ

既望城

壬午の桂興あ簇やまた全宵
ニシテのまひれとねとかまけ
浦まもとすすむキモのやど
あんたぐれをまどつる景
のほ小漕のれと群馬狂毫月
にうれてまねまあと船の甲
もうまくふとまほまうと

あがれをとよよと海のてと
すだらとをとくとまのは園
茅あつきをひよと新宿の初日
あくまみゆもあく次やうと岸ま
松とまくと送との風をとく
とまはあと岸を月をすく
あとまがくやとて湖上とれや
雪りれいとまきの仲秋すう
月と月のほと月と月とまを
わうはましとまをとすまを
れむとまと月と月とまを
はまとまとまとまをとまを
はまとまとまとまをとまを
わうはまとまとまをとまを

あらたなる諸佛のまくらを説
いたるものかうとせはゆきのけ
かあへ月のかへとのもかと
京極某つの教員の宿を下す
とひやへもばせふあそひて二三
車の宿のをとくもんせせま
ねわの夜あさまよつてふあ
真をもしてまかの宿をめらき自
はまくらをやとせられ考ふま
とあくびに角を横門ふかまくま
姫森母の縁も下すまくま

毛豆天祇

とやくやうをゆく神　うるおふと
のとすととむぢうち花も紅葉も春
うとくとまのきり　氣とわく
父母とくとくとくとくとくとく
果あらん妻がおまじのおもはれと
これとあらんとおまじがおはれと
おお祖峰よ庵と桂と女とおも
てほきうらんとやせまうお風よ
そ平日漫遊のきとんとんとく
川舟とくとくとくとくとくとくとく
文一からえゆよ直火爐の紫すん
ひきの青よかやよて偏子の躰む
くも絶えの青色も名アラの麻の
名アラとおねきのふじもさの
ひすやあらんむう陶朱公と舟
のきて玉船のああきよおひ
人ハ家主の教玉を情うるんや
戴きの紅裙も花娘の雲篠も

あらたなる神佛のまつ儀と神や
いさとひのわくとせせゆゑのけを
かめく月のさーととのうかこと
おれまつての歎息の胸をく義
とひーもはまふわくひてまし
車の信がのむとくもむとせ
歎おのむかくもやどくふあくと
真かかしてまたの実をねとゆき
はまくねまやくもくれ考とすま
とあくび、自と掛川がくまを
年家のちもく歎又ハ袖はより
背中とかくと車破とすけゆ
縫の手とがくとすれよとす
妻のねのちもく歎母の袖もく
姉妹の縫もすすみとし
妻のちも男ハ秋風の袖もく

毛とアヒル

とアヒルとアヒル
の上よとむねに花も紅葉もあ
アヒルをまのまくと氣とわく
父母とこゝりとひくと娘の父の
果あらん妻がおさとのおとと
これとおととおまかへばれとなく
夫婦峰峰とおととおまかへばれ
毛と小舟の舟底付の男と奥と
く平日漫地のまんざんとひく
内と舟とくとくとくとくとくとく
丈とくらべやと直大旗の巻さん
のまの袖はやよと傷子の袖む
くも絶子の青色も名アラの麻の
名アラとえねをうへ人目もあ
ひよやほんむく陶朱公と舟
人ハ家もの教を悟りとんと
戴きの紅船も花瓶の翠玉簾も

うなとよきくめまひゆんせう
きのねを伴ふとやう上
がくとくゆうとめうせゆう
歎ええ挽のうけうとよ
もんのゆうはすあゆうき
うと袖をうまてわゆうけ
き小林のうけうがれて見ます
の入るよせたれをさむは
ううあう

鳥賊

一鳥小大鴉を名を失す小
と鳥鶴とのひだと竈ととふ
はち反浦の巣を築して多
の曾子はす書へ人まゆ
人をけ縫はう題とまくと
二里の隣とあらう林に大手の
やどりをかく鳥鳴とまくと
系とゆくもひとくつきの弓
けやのとおきよけよえよゑ

ゆくあんとわがの才す情ゆ
うひれり候もられてからう
をせず只食むのやうす時
ひよは太く又強うるさうを
うめうめゆうへ害する
大と能やかの嘗たへ性偏強
魚うて槍うの遙と河あう
夷をのよすも縱に事向ひ人
不ふのまをねてうねうに事
とひひて寒とむうふ里すあう
てへ魚村の村を河し因時
よゆうてへ因烟を費す船
辛苦の勞をうらやみや我
のかひととつみの煙を喫ふ
人の戸とすらすらの煙をむ
きゆうて強よいれあひいぢ
とゆきうる煙のまかざして
ゆすりを付ふ毛それゆき

うなとやうの事のよんせう
ものねを伴ふとやう上戸
がくとゆくをゆくをゆくをゆく
歎え反挽のゆくとあと
まもんのゆくとやうと
ゆく袖えにまでおひねに赤
き小林のうけにかれて白ます
の余よ此夕くゑとぎむは
ううあう

鳥賊

一鳥小大弓を名と美とす小
と鳥鶴とのいたと竪たとす
ばち反浦の暮と暮して多
の曾子とすとすとすとすと
人をつげ根ほと題とあとて
二星の隕とあらうおひ太子の
やうとゆくとゆくとゆくとゆく
系とゆくとゆくとゆくとゆく
けわのゆくとゆくとゆくとゆく

かとよすて其事とせんき
あやまつ、あうとふむを食歎す
てからむとまつてはまく人あら
そまつたといふ歌民もこれを惜
候士も甚うとも惜む物を惜す
トも尊うええようへて三足の
金鳥と花さへれんを惜

後難抄集序

尾陽達左権本やまみ人爲考
る集とひみて名をゆうせと
立候ふじけ名ゆうとすくに
予ももれあまひゆうとをば
はねねき一おしのりの持
おももの日又考うりやうすま
ふやきよしたやうりのまき柳
桜のみよとほくその様うめ
おののきよしある心情よつよ
てゆきよ事ととあふものわゆ

れども魚遊のへとすくふのほ
のまくわまうととくとひめゆれあ
にむづらき薙のたおふそれとく
ま京のきえすりおまきせのうち
あきよんとひ望の魚の身うとく
あれとく

銀河序

小陰を下が御して城ねふを考
とりのまよとゆるかの佐渡うあを
海の西十八里滄波を隔て東西三
十五里ご模をくすくの海の峰巒
谷のくもくすくもくもくもくも
もくもくもくやくすくもくもく
はあを黄雀あほくかてあすく
連のくもくとあれいかまくわす
あては鳥よてだすと大良木
のゆくひを海せうすくもくもく
がおもろいとされいかまくわす
本意あきよとおじてあれ

すとおうて其船とせらる
酒やうへあうとふむか食歎す
てからうとまつはくとくらう
そまつはくとくらうとくらう
候士も甚うとむらうめくらう
「の海うええうううううううう
金鳥」をせんとくらう

西遊記集序

尾陽達左櫻本半生人翁考
そ暮とゆみとおとゆく聖と
玄佛かくはるゆうとくさくじ
手ももたがまひゆうとくとく
竹根ねぎーおしのわの枝
あとももの日又安らぐやうす
よやきのりやうひのまき柳
様のくよとゆきの様きの
おののくよとあくゆ情うつよ
てくよくうゆとくとくもものわ
あれうべ

れくよや京遊のひとのすうふじのと
のむうれようよたとうひあゆうれあ
とよづらき在の大あくそれとく
せき京のきとよりおよきさのくら
あくよさんとく聖の京れせんとく
あれうべ

銀河序

中陰をうち御して旅せふかまゆ

しりへきて聖財の慈悲をうなが
んとするはとお限はゆかとて
やのうへく船舡は天よりして
星きららと見えどもよゆの
あらうほの見るもしくみて
たまひりつるうとく揚らき
きくそもろううめいの本
れは子の船かさまくに書
たまうよあん候

河鳥や鷗波は秋くらもの内

伴覺紀行跡

林あらすのとむらかの宿のち
伏たうや一トマツのひのきを
うたうこれるの安あらと萬
一とせぬのかよもひのじ
づる向井氏たち來のめど
すき焚きて酒のまみえが
さきと甘よ幸きあふき宿ま

ころの水のあよよし原はう
じくて野よ一抱して百川の原
ともねるあよしてとくの秋い
もうひととのて伴覺は清す白
月の秋ぬすうかの映葉のす
きをすてとくのとくのあそれ
てもむかげてゆくとくと
よみてせくすくあるとくわら
けくやせきよあらく車をく
西ひじらまれまひとう秋の風
あそれうて船を駆こえよ
とつぬ其船やうよとせよ

喜也跋

その戸さへとえてぬよひとよ
わくもあよくみのまのとく
とくよあままあもれぞと
あそれうて船を駆こえよ
とつぬ其船やうよとせよ

しりしまで聖材の旅愁をうなぐ
んとうるほと育成はあつたので
やのうへく船酒は天よりうて
星きくことさえあるよけの
か「う」はのちももしてゐて、
たまひりつらうとく揃ちき
きくそくわうりうめい本と
れは子のねむさくらじに重
の被物あとくねくてしほる
もううよあんゆる

ゆく島や旅宿は候ふもの内

伴鷺紀行跋

林あつまの義もゆく寧ものち
ゆたわるよりつひのうを
うたうれとの妻もとを菊
つとせぬのとよあひのぞ
す向井氏ち來のめいじう
すき装ふて酒のまみえが
るをと甘よ辛きあひき屋ま
とすてとすてのりゑあ
ともかけ去ゆるもと
まうまのまへ車下ふくろ

こころの水のゆまとほおう
とて強よ一掬して百川の水
ともかくあくしての秋い
もうととゆと伴あひ清す白
月の秋ゆうかの波森のう
きすてとすてのりゑあ
ともかけ去ゆるもと
まうまのまへ車下ふくろ

すの下へも又エエと申す
うとうとてスルハ前語の
ゑくみゆきゆすと莫奇
種が何うけしスルハ前語の
れ考を以ち人をさへとれ
トや其は能と爲うゆふと
ひ南美の心をアヘトモ強
玉むのぬをされへきをり
めんと申してあらへ往の
は生の心をアヘン静コアヘル
められ候ナトツアヘモう
てばれと申じよよりモ成
まつり申す人をやくへたま
アヘ申す人をやくへたま
とやアヘヌトモアヒ寧をさ
ト候事もこれと画くナヒ丹喜
候にて情事やうわゆとモ
むれへ申すトモトモ莫樂者

このいふ年とれて是をき
け其む一すとがて秋の風をよ
くとさー御本を用とえて
あますとゆうとくのむーの
多のほあらかう

虚實集跋

要とよ一書サヘ四四

まねうに酒をあそて寒いは寒
とするこれようて其向へす
けとゆきに至る
化と身のもの生イカシメモ
モの情づくこぞりむづへ霞が
すの於を美食、霞ふ雲上
陽人の雲の中よお構ふ者をの
うする

下のふよく肩こり、朝氣の娘要
姑のよみよめうひをひうのすみ

事の事へもえよとすのと
 うとうとくはしてててへ於連の
 每くみゆきはすと莫奇
 疾氣の所は先よ虚無を參
 れ者とくとく人よとくとくと
 とや其の能と應る事ばよと
 ひ南毒の心とんとんとんと
 とひくのあふれへとせりよ
 めんとくとくとくとくとくとく
 は虫の心とくとん静よかへれ
 めれれれれとくとくとくとくと
 てばうとくとくとくとくとくと
 まくとくとくとくとくとくとく
 てくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく
 むれの事とくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとく

うとうとくとくとくとくとくとく
 け、其むかとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとくとく
 あまの事とくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとくとく

虚無集跋

虚とくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとくとく
 とくとくとくとくとくとくとくとく

先御在のうちの様子を記す
民うすと夜すやうしておは
被ふやうがんす
其旅寒物をまとうたま
の鳥居と蝶、春の泉をうき
とひよ見ふ他のものにてゆ
ほく真かてほのみすひとと舞

卯月のやは次テの浦へ入す
ろれ山、まき繁るよし月

いまだ続つもものうなみも多
すむとよやけのたぬま
しまさか

義とちよきをじよあく人
きをかまかと過化のとぎます

えよやほともととまの局と
（）めでよのうけく

田中一木よすうては東北かが
ふ（）うけくいすとよ人ト
あけとへかのま行はる中は新規

アヌハラムウの度のとくと
おひくれて袖をあけよ
人のものよせじとくと
（）てゐうへとそぞるよ

のつねの君よすうりのちほとれ
くれ本うれ身すくられへ
スア差よせとがすてかくの
にそそぐわらわらうか

明月
二二二

アラナニアルクルモヤハアテサ
 ルトキミエベカヌモドモロク
 五日十八日公主の隠岐にモトカ
 ヨエナシタツガサ人を思ひ切
 カルヒナヘテモサヘキミスカレメ
 そのふもううへきミスカレメ
 肌シタモヒクノトモモアモ
 モチサクタス、アラクルヘ
 モレサムミモ、モウスカレキ
 ルノハカシテ、カモヒテク
 番

拾

リ

ス

ノ

モウモウメニサマアカセヌ
 ハアリニヤメニサマアカセヌ
 ハアリニヤメニサマアカセヌ
 ハアリニヤメニサマアカセヌ
 ハアリニヤメニサマアカセヌ
 ハアリニヤメニサマアカセヌ

東吹傳

老人東吹ハ後業アリテ其祖父
 沼川堅因の農士竹氏と称す
 枝モトリヤハ晋希母方で
 よるも前ノレトセ七十第一
 ときの秋の月とやある林の上
 あうえて花をみゆきあつとがく
 多きもひきうちれ木のほど
 とすて付くるに静さかじ
 の向をかきむかして大半め
 典の墓につくよまうし時國と
 学びて幅の廣どく、かるい集
 の君より俸禄をえて父魚瓶
 薙の惠すぐれされとも甚
 とどひて多きのれと破り枝
 を折て葉をすつ取つたる年
 のけりめに市店と山居、かく
 さくじもぢとおと松せられと
 さとい車によほひとくめ

上生れて東野と孫ととも
卒大治朝市の人也有り
入月日治ハれの四隅つま

袖珍抄消息之部
古経舍黙池撰
一ノ紙紙ノモヤモリヒ切くシ
ノキエモ点寫紙紙ニシマ
紙紙ノ書心又テモナリ
泡子是モの音量の略也
吉川山がほと上まねもド
凡モノの紙紙ノモナシ
ち紙紙ノモナシモナシ
秋の序ノモナシ一極りとす
口紙紙ノ相拂トモトモアハ
もア能ノ能毛筆平根葉
叶ノ葉ノモナシモナシモナシ
アシナシモナシモナシモナシ
えモハ新ノノノモナシモナシ
アシナシモナシモナシモナシ
紙紙ノモナシモナシモナシ
口紙紙ノモナシモナシモナシ
モナシモナシモナシモナシ

かきぐるめのうきの林原

あはくちあらわて移も一
まよまよと身もれもあら

おもむるがくとおとめく

まよめのむくとおんじゆか

おもむくとおんじゆか

日向く地にぞとておはう
鳥と魚とひよておはう

さうすの鮎とあわせばせん
毛尾とせんすれいのね

くわくわくとておはう
くわくわくとておはう

おはうのくわくとておはう
おはうのくわくとておはう

うちうれて二もき鼻のけま
ためりゆるますておはう

おふで共一ふとほのけま
うせんとくわくとまく若

またとおすへきよゆうて絶
人をやきよせんゆうて絶

くわくわくとておはう
くわくわくとておはう

おもむくわくとておはう
おもむくわくとておはう

てくのくわくとておはう
てくのくわくとておはう

ふまもとくわくとておはう
ふまもとくわくとておはう

時く限くとておはう
時く限くとておはう

そくろあらわくわくとておはう
そくろあらわくわくとておはう

ひくとおもむくわくとて
ひくとおもむくわくとて

○

怪夢

おまめ

二月廿日

叙説事の山うつすめあはせ
きみのくわすへくまを

もと

其角換

ゆき端度がさんあおひのまく
ひりもあらひゆうりうすのる
はれもあらはははは、追付
ひすゑれそつねうひひ
保換、底敷白地じうくは
難儀はと振のゆこくは書付
下す

秋の心うねうみをまかうくや
ちうくやあらはる極めきくは
山経まくとて居りとおまつ
おがむとて続よおりとおを

吉良

白葉社見ら

一石屋の陰半ばほは下の御所至
あるあく豆一粒持てられはまゆ
并葉まうぢる茎をまのびやすり

日中一のむれまのうす
さもとおりろおねおゆく皮

ひくふるひよひゆるまくとせ
おもはまかみくの羽根も

これ、鶴一とふとくひうのま
ほく人のはうべりひくと

○

一青苔芳わむか節がまうる食
二木の一本木押付す
あんぬぬすすはなれとあま
こいえますすくもとす

もと義

○

集歌

あはれほん附のほづはるは年中

まほんとよひとすとすと、触はらす
ひきよやせば付はる難儀候。この
おとづれをひきよがよつてのう
致じよふりあすとすりあれ
ひわめくあめの手稿はゆく
もねり

森のやすよみをとすて
とりよおしよ

二月上弦
もねり

本因縁

とよよき
さくのあうなみをとすて

森のやすよみをとすて

とよよき
春紙紙

春紙紙

春紙紙

さうあうなみの賜庭のねよひ
本とよよきおめくわよすます

二月下弦
本因

とよよき
神美の角

旅宿のねよそやうねりよ
たよすきのうひは舞會も
まほにまほす人あよとよへ舞う
さうかのねうじとよくいふ
因縁のねよそやうねりよ
とよよきよ二ふきともひう
こみくじらひあよとよくいふ
歌うかまむたかくもひう

まくはりをとてあくに触ほやまま
うきよやせじ付處難能候。うけ
まくはりをひきよつとものる
絶じきよつともをまくあくは
ひきよつともをまくあくは

モ解也

森のやまとよもぎとあくまで

とりよあくよ

考のわらひが階級とあくよ

志とす樂のまゝ一あんひをと
る事と爲く自從立ちあらう
うへ思ふのをかほとておも
日未被あはれておこしておも
心の取扱ひをひきとおも
きくねあら葉一毫の意を失
完す。

○
六 自從の如
古事記へたふれと付く首
をもとからしてりまくと
舊ふ舊とおもへぬがまを
附けあはれてはせんよ
身と聲とをいたす從て來葉
つもの種うどん附う林をあて
花葉の毛羽あくびれんよ
此一まことのいなもうつを
ゆうち鼻うそくおこたお肩
のひうちおもよすやうに
あわぐ。

飲酒一枚起精
もうういやのねよりくの上声
まれまつやさむとほりす
ひく又からんとく葉をのそ
飲ふ便やもくと只性生れお
あはれ南無阿彌陀仏とて贊
ひく往生をもと思ひとくと
一杯のひよりかあれるぬひだ
但ニ秋四時の音歌とやらひれ
ひく海寓も決定すく既と
き海音歌ともとあふううう
義うひあひかよあく深よ重
ハ二きのゆめされひよする事
性とししあひとくとほきん
人ふたと一代のはと学びとと
一文不知思純のうみが一
下戸をもととあまうとて共
一而うほく酒を飲す
右飲酒一枚起精へ見る御室
うねのよーあがむ人のほ

小つまみ等を多く持物にてて
にうつてゐる所はすりへ西ふま
處處あらすと寫してありひつて
多々大晦とせられ、おひつて
と写して大晦にシテ用意所

おひつて大晦とせられ、おひつて
おひつて大晦とせられ、おひつて
おひつて大晦とせられ、おひつて

みづまの聲を挿めよとて
にうきうみのひはすりとてふま
處處あらすと寫す。あつひま
方と火通とせんれいをほらす
と寫すと火通とせんれいをほらす
句

ねうわくをひめくとてかのうす
やくあへたるゆくやうとてかのうす
のうとあへたるゆくやうとてかのうす

十六

其角丈

其角丈

其角丈あらんとくのひはせ
をとくとてふ通とくとてふ通
其角丈あらんとくのひはせ

かく崎の松をとくとて櫻をと
ふはれ事とて草をとくとて草
木かとくとくとくとくとくとく

十六

一意をえよとの句

一西林の森のゆゑひかじきをと
あらそとよきのすとゆゑ
おもあらそとよきのすとゆゑ
ゆゑ一いはくとよきのすとゆゑ
ゆゑ一いはくとよきのすとゆゑ

一其角丈はすとよきのすとゆゑ
おもあらそとよきのすとゆゑ

えつまくやがすまこのゆゑあ
まつめやまくとてあれをせうる
わきはれくもよそきの貴おき
へやうきのまえくも花葉まゆ
不ほふき葉の葉の葉とまく
あまゆりは花の葉をばくと
まつまつ内陸の葉の葉をまく
の和へ土をとめくとまく
お病の葉くせん葉をまく
てあまゆりは花くせん葉をまく
にまくとまく

七月三日 芭蕉

モロコシ山の花の花の花
風の風の風の風の風の風の風
は波一ねじ花をゆるみます
ひらゆく風アマムラカシ

ふる日出假名叶敷の房
そのの花はまかはれづるま
きくはのうすとてててててて
めのめの生もと見ゆすとてて
事もゆすとててててててて
黒トヤ種のとてててててて
名前もととととととととと
くねり草よととととととと
く地をとれ怪ひあ勝

一句假花上喜び落葉を落すな
つきせのとととととととと
のととととととととととと
ああよととととととととと
きの暖ととととと

一句假花上喜び落葉を落すな
しふ更と辛じきとととと
てけ玉過る老けられ水筋
筋のうとうえのよせん人とと
志老の妻子ととととととと

オオシマヤ族於郡をかこで
十の指をまきす思ひ切はす持
てまへて能くの快適りきて
あ

一通通ひハ大坂にてを便に
いきとのゆき持量ひつゝ貰
志三木はあよりあくある
ゆく人の事もいたれども
西行被冠の志似あひや
くとひまほの人すひもの
うものゆきとあすくゆく不審
ゆきあひゆきとあゆくゆく不審
不思はすくひゆきあくとく
てありともや難のゆきけ
くあきくすハむづのを食
くりやくらす

六月廿日

水様

石義

西行

の後を手にし、ハ船と見
よやうに見ゆる。又多々重
りて月が立憲を上とけ
うりとくもんとうかと日がよ
二も二度と見取時ももの
あらはに原よりのものと
學したまつて一毫れどもか
ア縁香をうかるとまざり
し経てはおれども興すも
とよ傳つみすのみちうう
ひくまれと御神ととの
海と絶えそばへ貧きもの
とたしけ志者と肥しもと
見すととの走立の一筋あ
白糸の又志と勉め情と慰
めあうちよ化の是耶と
ほれり傳のをすと愈
き氣ありれどもうた空
の骨と極り而りのすちをた
とり樂天の物とほし社を

すよくよせねが郡をかうて
十の指をまき思ひけば十の指
まくべれり快いはくじて
あ
一通のひだ坂とを便に
くまとひのす指量ひて一貫
志こまはあようくとくある
ひととくのむかうたうひとく
ぬれ絆のまかはあや
くとくまはのくとくある
うのゆとあすくゆくとく
不思はずくのゆくとく
てありともゆきのゆきけ
うあくとまはむくのを食
うすくうすく

二月七日

水穂

七歳

ニ喜ヤハシマシタシテモシテ
リセムは候のかきうどくも、
一正義ある子君のち教へ今ひ文中
おひづりにて仕方すも又通不
はり此をのこりゆきと
ちをみやかせ候ふれやん
はすのうりてお狀を我ども
を察する事あつてありひえ
うりやん

一休余處と成人がそむく事無
承役

○

奇縚辱徳へ想へてひが

母様の御言むすびぞよきう
くゆめくえまゆく御考考為
も優等をあきひが一良枝等
うつゆるて要ひ

アヌとしがおうもや然候のた
てをほほきく極志もあらば
絆あ

一喜仰もく感心付ひうな
少く抱てて在大物の心難
學ゆひ思付難うしにうな
うきとぞじへとおぼえ
名手のゆき因る立葉を左挿
紙、大繁入るお詫び狀あ
もあらくあられ跡あふやい
り色變ふるも

一因々おとお拂ひ立葉は葉一袋
さう一聲おどきもくお嘗
志難あく葉は桃名賞取のと
し

一葉は葉色のすえハ原切
玉あああ角持名序本實作
之境界不重ね御際拍子
名手のつけひ御よし葉お
お心これほねれ心きと

さきの宿のゆかぬめの宿
の宿園をあつたまくと見れ
やうな事は跡にあらわのれのち
うたとあるは是れの處と見れ
ほきをうれしきやむとく
くわやまき

○
池魚の夷那イナとも甲斐文の童
ヨリうつさるく若者アツメシの道
ノハツ經風ノハツキブンの道と有りやむ
されとも残よとのり身化
が身附タタキは身と大よま哉が身
ますもソルが身ソルガシをやくすり
ほきをとくと身ソムのノハツ古
ノハツの身ノハツガシと身ソムと
有り身ソムあれくび段クビダケ乃
前マサニすめはすも速中ヒヂロたり
身ソムと不取ウタクら經残ノハツも不
身ソム經ノハツの付タタキあく

○
四月廿四日
小枝丈
毛糸

此處今より西本多斗島シマから
一里信シメすえ、越カスガとくの島
かく先ハシくみゆふ只四望シテシモウあむか
のすゑひづるをひむきぬヒムキヌふ
くねえうづく

えりや草の上シナシたゞし殺
さとく蟲ムカシを神カミ代タメのとも
せよかくい神代カミタメのとも
神カミ代タメお魚シカニのまえお魚
ふ魚シカニあらぬみくらあそ
峯マツコ峯マツコ等ドウお魚シカニあら
あそと京大波カマカヒの波ハ

被称美之處

正月廿四日

小枝桜

芭蕉

往くう蒜みてます花のま
ねぐらむひうはまちゆ
蒜とおこぼれ人すとも

○
志まう約束うな難翁が絶筆
恵まあひきとの人へ笑到を
女子も集う我を薦め若の蒜
芋をうくひし御先玉に
より一白毛と一うめんと
弓矢を突き下すとねひよ
の難翁が人び多くて
面倒あつゝ是も子すと
おまへりソ歌すり歌す
ほつともお葱平の物細工人
へ謝乳被すくい殺生の聲

あらわの難翁がも只空の
かうくひむのすゑを難
くねとあらはるふし
人のうへ半身とどり細玉のけ
あとさへじととよとお達
こそぬるせともうしつきと
えりのふくわすとの匂へ
アヘのゆれあるとよてたと
へ寝ますとよもよこせ地
もりひきとちひきと難
ユハのひとよすへすあ
もゆるひとと心付を難
まくられに二あれ約を
これに五の美きからとて
摺鉛玉小袖の紙やねき
祿のくすむゆきまきま
すく武林連中ふるの
ひのすき龍紋白鷹の御衣
れと森川の笠草と伊賀の家
中のくすむゆきまきま

ゆく道を口にす。

（之に）すや絶え来る様の是

二月十六日

芭翁庵

一茶校

又武士六殺生するよりかうと
云人少す人を裏手と捕まつ
猿を殺すもあ。やまとく
只心の事とさかがひとく
の猿はつまむるこれうちも
りとせんせん理よりへ能ひ零
すく



附合十七件ある残記を最初
くまんを算すくは御の味
の味ぬうちよば味と付んと
ひづかれて一向し謂は附合
もあれぬと餘りの味
おのづきよりの味
ひそむけすと退くを
何よりのぞい御の味

板の二事のとその甚しき
うきかすとの付あつてを
表へ爲あらへに情あくとを表し
て付て変化ありてよく筆によ
きすがまへお旅立たとおそれ
そほすもれつともく通るのみ
致しはつて初のよき切考など
て二三のもの有る上より筆に
付すもたまにねぎとある
多く物のよび難くや芳由
板が成ると思は段棒までて
有りへ人の中も七八人あ
ておは被りあらひ名など
も付合の術さほどこれま人
前と連ひすとあらがみか
くやうとそと所と十七件
をゆるよき変万化の術
とえみのふ只の付合と付ぬと
ゆゑりかて付合の子変萬
化とすと人をすとく

十七作の法事、一月を向て
子変方化の佛う坐事す。百
顔手もつ及ても所心三件をお
不や山教するものに於ひ小窓へ
そやくらま事あはくほりの
人を仰けて通す。おひすかに
只四天人同人のまゆゑを真化を
そやまき憐れ感かれてハ飯糰
手邊船とて名す付されしもさ
ゆくにウキ中糸ラ美シテ
狂歌

六月廿日

正義

狂手もつ當事のく清あが
小枝換

七月も鷹のぼるあれ哉
けめくへりすはまく川と
宝めかくはるるあれどもあ
よそくまむらやく城人も夢般
白いづく

○

禪の猿はるきくまけも
狹もとくふ吹きと聲ふう事
若きはりよとくうるる事
先づ鳥肩、加生城人挨拶
男うきのむれや秋の月
八月四日

子歌枕

正義

狂士歌の切末ねり絶歌りく
ひ奇志大業せ仕え先づ細縫
あづみゆきうき歌すをもと
す事歌日へさううとくえん詠
其一とぎの変化事のとく
そ一入ソもううくもと大丈
の竹笛もとあると舞かる
すうなきれども歌日ちしが
年うき又と金歌ともざく年
中魚ツもけよと舞事考も
ふすじききりあく魚事と
まよくもととくやうと

十七作の後より、いじてゆき
手變方化の術を考究す。而
頗る面白く及ても附心二件を
不やし知るのにはひい小窓へ
やくらる事あはく候す。
人云ひて通すおとすかに
只四人同人の事すとす他と
そりやまは成がけてハ他
手遣船とえす付されしもさ
ゆくはりま中条さんより
社頭

六月廿七日
立義

既暮すちあらうとくはあ

小枝椚

名月は鷹の月もあれ候て
近づくとすれども月の色
定めかくはるる月色もあ
よとてまくらゆく城人も夢遊
白夜

○

桜の植はるきとまけり
松もとりみ吹きとせうる
めぐらへよだとくその音
先づ舞扇か生歌人撰撰
男うらみのひ歌や秋の月
八月四日

立義

臣士秋の始末秋の物語りとく
ゆき玄太茎えむはんせぬ
かくはくゆうむねをよきよき
す季次日へきうとくえよ
ちこときの変化度のとく
も一入ツあつてくも大丈
の竹竿もあこなす跡ある
すくされとも頃見りてお
ありる又て金かどもかくは
ゆゑりむけまき事ある
まきくるばとくやくとく

船山先生の筆の如きは、
柳宗元の筆の如きをもてて、
危うく死んでしまつたのである
事も聞ます。まことに、
下血が止ばなくて、運氣の
うちも走り抜羣族をもてて、
のめく（まく）とたゞりて、
やれやれ、重病に罹るのゆゑに
ゆづるやうに、随分苦心するので、
有りす。隨分苦心するので、
て、尋ねて、彼の筆の如きは、
ひのりあつても、くさたのひ
のれ成るが、うむじつうも
よそ及ばず。

七月十七日

七義

牧草松

七義す。はくまもまもも

船山先生の筆の如きは、
柳宗元の筆の如きをもてて、
危うく死んでしまつたのである
事も聞ます。まことに、
下血が止ばなくて、運氣の
うちも走り抜羣族をもてて、
のめく（まく）とたゞりて、
やれやれ、重病に罹るのゆゑに
ゆづるやうに、随分苦心するので、
有りす。隨分苦心するので、
て、尋ねて、彼の筆の如きは、
ひのりあつても、くさたのひ
のれ成るが、うむじつうも
よそ及ばず。

○

七義

七義す。

七義

一思ひ立つて、かげえ心もあらず
身のままともかくひどいもの

五をかんおこねあつて
しむ又てのまの門人す事と
えすのをくわざれづりか
五百字系のもう西行の撰

幕おとおやくの毛糸をほり
きよに裏服ぬまくと付する
おときた二段西上人と通ひ
しよもすとくまのまのま

ときの薪かすと引付の毛
段ゆのうやとよせばよし
くみ

和内中

は節丈

毛糸

あれことあるて、やまとせせ
○

一松屋旅店での物語で、旅
りさくのれりと直すよ
旅もよはぬすむのはあ
い服もハ草モ神祇退善
祝祭半式儀禮も人の挙措
すくふる上よ人の轟
白えさめゆゑすむよし
今まくまねのゆくち旅

旅の宿さむは並くもろい
くみゆかすは彼毛アモ
ウカクアムあんじよ不來ふ
尼寺山中宿すも立わ
のゆうああくあもし有事
ひは段あくくうわ傳を代
そやへもそせうて是も
草れるも能くうりよ山中
四苦くよかては御く士来
丈草凡昭正秀おども向若
足さうりやひ旅付切うつ
方三四句の付てアキツワを
のあひうつめですひまひ西ふ
ゆまなうらちを中酒アタ
ひきれども仲好く用ゆるや
名付契と先エテ教も難
いぢと就れ内もと付され
ゆくもく仲好く用ゆるや
ゆくよし即ちひゆく用ゆる
枝段言もゆくのれのたる

之のあはいきよりゆきもあく
二十た七年秋の左軍府へ事務
ひづかまき二人をと三人をあ
もうり高師一室房時ひのゆ
火火文、我らぬどもがくう
ほどのをぬのとて一色あ
ひあくもおはせんに一色あ
まうかとえむと方次第の
まきのすへてよの若ニ種
万子殺を秋のゆかおなを
の英雄、も能くうきつみ
あくまき

十日まで
毛糸

小枝松

一毛束
一升

一毛束

一毛束
元合
官もタ季の板合は盛り官
ひをせ候吉とおをうすを
柔ら一株ニ井ちうり便ひ
りひPひも根をもあらむ
まち入ア

十八日

大八指

○
山民月桂雪門解
庭坂松燕起川柔

併はほのしまでとの松
木うちふくろよしくじまの松

けんとすて能社の変化と
くとねあくまく人うきりと
又怪めうめと云ふぬ葉情と
葉のまね能社はくれき
ものとけくやく

墨縞や葉をほきむおせま
ほすりあくくとあく葉をうけ

桃喜

良化様

甲六日

○

ははと能作深のふも草と
山下水やうと雪とを上りて
む其角うせうあああやか
及くうじとゆくおもやの

廿二

とを紙

仁多魚松

善吉よ四害毛ノタラ子殿

○

和松魚ソ羅翁さりにがき
若の父翁一ノ木とともおえ
とめくわす追付系上

桃喜

おちあづね

又えん小舟のや山和つと
昭里は波浪ほひとあらわす

○

然知財お性共一富孫のむ玉割
争の先梅とれ用とすみと雪
枝門修志とひくとすとすと

七

枝内丈

○

二百歳せつねんとせ先す詫きし
の初よおんとんは能作肝要
三事くち老ハ源山ウツモトさん
はとちうへたれくめうの
うそい
一季もあくうる年もうをはゑせ
はせ事もうとくとく考沿くす
入る始ふ井の角うせ

十七

桃喜

○

筆文詰り物を詰りとを言ふ
あく板帳萬と唐紙といふ事
よツ縫きよき號絹墨板を

殊の外妙絶也

之卷

七日

之頃

新美一升革二升油のやうれ
海豆付とてあまの油使
菴主美松一市斗小先を油二升
余なり

あゆもくて種油や豆の日

松屏風もひどく妙 無能
お便りの届けやへとく勅
おととや付ふり

松風松

とぞ

かくろ松

又かま萬一とう七大松

ひらひ浦ノ島の動葉流

古直觀も既下其角風也

之人との一軸、想め得きよし
一あくやうらううりひ日赤裏
上井良神、小栗極大加賀、七
才、おひじやうせん化粧もあ
あるつるくとく、松浦因久、猿
川守てあみすか木や萬
ちかね松

廿年

毛並毛

さんとうらういふをかうす

ま民府御ますすれん葉

のゆそくまとくまとく

二種の掛物、怪石、一匹、翠

玉、紫、味やむして、七重き

の拂除、七重の御手

ねききの拂除、四五月と

季と定めひわひを房高

作是系、三月の李、萬葉

万葉はたれ、是の御歌

支川入東行傳

廿二日

支考丈

支成

冬十月とかまきてあゑま
あくじほとゆだわゆもき
尾羽燕のよきを休す方有
人畜よ告てお覺ちた最難寫
しのむほのよめ月やうほ
のくふやと柿の白しきを
くせ化（キセカイ）とすやま
笑（タマラ）めまくすれども思
ひすきかきされれおもひもも
里（アリ）すき先一輪ねれ古色
柿高（シタカ）れおねももも

四月吉

支考丈

其角難

梅（シモツ）もく（シモツ）一宇（シモツ）
一年（シモツ）の（シモツ）と（シモツ）す
さ（シモツ）の（シモツ）の（シモツ）と（シモツ）や

○ 三月吉

武陵芭蕉

梅丸老人

二月吉

武陵芭蕉

○ 三月吉

ほらまん青枝（シロハゼ）やもの上
一葉（シモツ）は（シモツ）模（シモツ）すや 杜宇
水光搖天（シモツ）自（シモツ）落（シモツ）に（シモツ）模
あ（シモツ）の（シモツ）匂（シモツ）あ（シモツ）一（シモツ）
う（シモツ）やと（シモツ）故（シモツ）と（シモツ）
香（シモツ）水（シモツ）も沾（シモツ）と（シモツ）の（シモツ）
事（シモツ）あ（シモツ）かれ（シモツ）の（シモツ）と
す（シモツ）あ（シモツ）ほ（シモツ）と（シモツ）沾（シモツ）
横（シモツ）の（シモツ）又（シモツ）あ（シモツ）て考（シモツ）
財（シモツ）の（シモツ）も（シモツ）う（シモツ）これ
とも（シモツ）の（シモツ）字（シモツ）ぬ（シモツ）水（シモツ）の（シモツ）
う（シモツ）け（シモツ）の（シモツ）匂（シモツ）も（シモツ）
き（シモツ）エ（シモツ）思（シモツ）ひ（シモツ）貧（シモツ）の（シモツ）余（シモツ）あ
とう（シモツ）す（シモツ）因（シモツ）よ（シモツ）に（シモツ）余（シモツ）あ
安（シモツ）通（シモツ）れ（シモツ）の（シモツ）また（シモツ）も
あり（シモツ）あ（シモツ）の（シモツ）考（シモツ）

きくはうやりて事止ぬさる
とれりあへ白の病根にと
云奇文と未合へ発ひ

荆川文

○
ありま寛じ事あはれある
其角も一あり申る高良へ聞
カムたゞして夕餉が一會す
幸い被ふ索丈主御と作合
幸あん葉がやもんと
七月十日 荆川

後柿金之

○
うそかの心前ひりゆ
あらあらこやかぬれのうれ
古色や高きれおきれのを
其角

追事下すわざを行道中
清子の宿つよつ約束やひ能
冊はせきり役あつまよ
書の虫入るまよ

○
すれすれ茶飯よ拂ん手のこれ
せばうまく能くよすらすまく
写くわゆつもまよすまよ
坐

廿二日 荆川

○
追事下すり外爲はぬくねあ
り御のまめ向くの失念風年
なむし氣に追引ります
その事はちりせうのまの家
ゆくもやを尋ねて自らま
ひあらえます傳て追引度室
後事うめくとおもへがるこま

山中道入江

印月廿二日

王義

風俗文

○

朱まくわがお勢の月元は
おと白トノテ多々に高トモヒ
て是トヨハシのものもお不
きまじかうとあかりやあ
されまつまちもく海潮の魚葉
月宋とゆうとひま行運かす
もあまき船からぬう舟と船宿
あわいし下びと

十八日

め移文

拠古

○

只今廻舎の宿主三人高橋
却下財と多ひまくと
ああんじてすみをもうぐれ
ほひまくと海二井口と一於
せうれへゆふ御室茶碗入を

○
保生佐あまらん
えの名代えどもとらそ四十粧
少将尾のすの館信よ
まやまう焉國と通ひて

かづや茶船

王義

○
菊の島や庭まざれる萬葉
丹波とさとの四川
全屏のねれ古きよきこより
程度く他凡と來すとくに連符
連符れども愈前ひまくの
あまくおひまくのまくの
おゆまくへ連符も本アキ
くら度きに戸々おむれあま
もまのとくあらあらま
玉白被と赤と脚の纏とわ

仰ふひ御の様りと被りしん
はゆる如くもやつすひゆ
も之を施する様あへま狀一
通は狀のとて大極太極^ノ
よき御えよ運若かれども
字文主のあはゆうと
シ被んすと南手りまと
ひれ様り

上方走後三歳半と潤ひふ
や空をすすめゆきわゆは役
不擇太色我囂役若無事家
お戸屏風入用をある事
やハ五老ドの小豆もはけく
ほひすすけ意象で身すく
庭でももくらううれい候室
かくても盡つて頃は向く(系
も絶地アシ)

十月九日

詩六解

もき成

追立アハは實シ役在御ド聖
のまの務まくある故圓
セモカナキ水曲ともそ
セモモツ船アリテ移々之
新草を古木より水の舟
古舟アリテ新草ニ又て新舟
上うアリモ船がまくアリ
伍キモモケリタキ其名を毫
トム其名をアヒトモ宮のア
アヒニ二本も舞ひとく是
船より水を食うての葉うす
有のうとえみて百頃アリモ
其舟船もありおりろく
慰よし水を食ひ水すむ草亭
アリ

廿二日

秋山主

七

鄙ちづ

おりとすみのけまをひよ

花のあらかじめのうや
以上 そぞ

○ 尾張川すまうきすまひよ
とみよからみ神があれをま
ひる文をまつてうりと
ふり そぞ

○ 千里尾張太田のまか
又 そぞ

○ 庄塲すくねみす橋すがまち
朱嘗はるゑまうじゆせ

○ 自尾別廿二日ツル山すたる
は先こそく才もゆけばこの花
と種シテ一見つまむも草す
経流波を二に白いふやうな
空ちもと種をすたの叶
はぬれあすてるむすももの
白上あらひあひ面候よあれ
せり そぞ

佐多文

○

一桃源のむ勤む黒まよ吉渡
おと云ふものすくは本すと
松原す冊はまたへさむれ室と
つとめととすとまくは本一巻能能
ゆゑ向付すと付因門能能能能
りうあうと松は居うけま能能能
峰實をわ第五と今鳥と能
むととすと松は金糸くわ能能能
う能能能

一弓矢東大坂實之秀子元かけ
弓矢もとと松とまつて大
義ひ故してて。

一弓矢東大坂實之秀子元かけ
弓矢もとと松とまつて大
義ひ故してて。

一弓矢東大坂實之秀子元かけ
弓矢もとと松とまつて大
義ひ故してて。

一弓矢東大坂實之秀子元かけ
弓矢もとと松とまつて大
義ひ故してて。

一字波志村人原了了の事
空る事多き事にて少く事多
とあひて心地の事無事

ノリ

六月二日

鶴見様

桃喜

シ古ニとすく既五月四日

大は後のみれり一毛を経て
重まふ事のとくとく一休
ひづくも事且やすらむ
とくの事

芭翁

毛衣

度て秋を度て一月を過ゆ

余は後のみれり一毛を経て
重まふ事のとくとく一休
ひづくも事且やすらむ
とくの事

ト本音傳す事あきらかに今
玉蜀黍の名者なる事
内えますます美き聲也
あま向ふのは食す事あはる深
のうえそぞやううと發す
ねまゆれす事を又あれば
此處の事也

川船やうす拂是る事す
職人の事と感む事有事
との外少くし事也ゆ事

ひづくとくとくとくとく
ナハリ

か生根

毛衣

生えす事と感む事有事
況て事と事の事也

一鉢争ひ松城裏へゆる事
ウサギ立候之

一鉢争ひ松城裏へゆる事
ウサギ立候之

五月

夫はふるいれひの心の故に爲せ
すかうひの失や想を從ら盡す
子心のかに二十六度の化をと
承のとおもひをもつてよけ
じまつ

二月廿五日

游行難支

○
無事みとどりとあむわと
ゆの無事と因からひとすす
くと押さうりやひさんと思ふ
歌の瓦表れと志のきをひ
生緋毛精をすとほとよ
ほとすととくとくとくと
ほとすととくとくとくとくと
生興翁肖面像とて

はな波しき寺町の秋田屋
春喜と称みまんぢやくくせ
生緋毛精の金すとほとよ

ととと内シテ御心差すと
とくと様子とぞとんとほと
又生緋毛精の十夜半
くの経つてまくとておお
おがりいやねり緋毛精とすと
おまのくまくとておお
生緋毛精とおまくとておお

十二日

和休丈

桃喜

○

松風院

二月廿六日

加多毛と見葉もと扇のとく
こととお酒承えおはづくと
一は生緋毛精の十夜半のよ
伊豆佐久の上色生緋毛精と
おおむかと見叶とおおむかと
おおむかと見叶とおおむかと

卷之六
三十六

至誠の如きがむかへば、かく思ふ
能程、おもてきでり。

おもひよや餅子事文する様の先
事もおもむきで致とあくまでもおも
事もおもむきで致とあくまでもおも

うじいよや餅子事文する様の先
月日二月の事とつづけ

おもひよや餅子事文する様の先

本居宣長

わき見ぬうれしき風景を深く
まろくときりそり一ノもうすか
とく草木玉どもよむわねくわ
うみの像をうへはせば
津風さよしの草野は花見見る
聲下風てよしの色を知る
と春どんぞのれ草はよこすよ
みのミツタガセをそれとも
色候そろしく改くうだる事
あらぐのれんともおじうし
ふくやくもほく使ひ教へる所
萬字すてと事すと金とおお
あひますとおおとく使ひ事すと
えき事すとおおゆはあくと
とあ

一先を盡するまこと是中は遠近
着想もとて感ぜてひま
れくめ意も種類すうへくた

のまき海に近舟数里中より
立候きよしと
二三日はてあはすとてたゞ
わざくはれりあはすとて
船立て

東月廿四日 色見

○ 斎思屋士

弟はうれしむる事多である
あめい草はいあはすとてたゞ
立候もとてゆうじやうをた
さんとてきく事もよむある
う若身もとてあはすとて
立候もとてよくあはすとて
彼方へ見ゆけ船立てよも
きゆまはとてよくあはすとて
ひゆすと

てよもとてよくあはすとて
思ふ事くゆくあはすとて

本居宣長

おもんねうれ多の歴史を傳承
まちくともゆくわがれしとお
とお事玉ともよお約れしとお

おもんねうれ多の歴史を傳承
まちくともゆくわがれしとお
とお事玉ともよお約れしとお
おもんねうれ多の歴史を傳承
まちくともゆくわがれしとお
とお

一先き里ちすもよきやう遠江守
着きあくとて然されどひま
わくめをも種類すよつた

のこまみに近舟哉是る
か舟々下よ
二三ひじりあはすとよ
わくめをも種類すよつた

○

寐思屋士

弟へやねきよかままである
あひまくはあまふすむとて
おねむそしゆくとよむとて
うおきよかまふらぬくとて
おがくとよくとよくとよくとて
おおひおのののののののの
彼方へえんやけいおののよ
きくよほとよよよよよよよ
ひくよよ

おまえあじゆの大井川
おまえくわくよおねむとよ

本居宣長

三七

卷之二

三

十世子

明治文

五

ひとと汝御所へおあづけを

もあらへておまほへとおまほへ

御座本源シアホと押計を取

おもむきの事一、おまほへ

おまほへおまほへとおまほへ

方稿丈

○

寔事あはとア傍ヒル上ニ争付
リテ急急の事無ミテ水
陸ハさそヘせんひつれよ、家
字もあつては侍上廢ノト
はひあ細ハシ角の侍上侍
ウモジテおまえ車舟中
車船も船ゆくもけ甚於
先板。後く没無きのま
は申はまひし一カ

九十九

○

小向寺外松

卷

又ふる

綱代民歌の事思ニ通て

梅の木はやうう木は梅の花

はく枝松よこすと在り松を

ノア家來ゆきまよとソ

せ一日

松喜

貞方ニシテ入ル御少少役事
御心事を事ととの外禦
てモ御内を事と申す事と
方室の事と申す事と御肩
の事と申す事と申す事と
相手にあそび候事と申す事
御心事と申す事と申す事と
右耳肩はあそび申す事と
玉タ筋事と申す事と申す事
無の事と申す事と申す事
セキタタタタタタタタタタ
セキタタタタタタタタタタ
一絆おど歌歌申す事と申す事
ツク人ノ歌歌申す事と申す事
ヒヨモニ歌歌申す事と申す事
エキナカ歌歌申す事と申す事
ツク人ノ歌歌申す事と申す事
ヒヨモニ歌歌申す事と申す事
ツク人ノ歌歌申す事と申す事
ヒヨモニ歌歌申す事と申す事

二月十九
芭蕉

○ 芭蕉雅文

一萬月十六日が暮、余すと二万
落葉松原へ廻りてこれと並
に落葉松ぎりぎりとされども
四の半のほどとやうとせんと
まことに走く跡ゆゑのと
きりとも居るのとくくく
すく西アラはすと申せ
ひすい見すと人原と廻り
お車、あらねりのよき
十六日酉も未とあらじやう
ツク人ノ歌歌申す事と申す事
キテモ歌歌申す事と申す事
キテモ歌歌申す事と申す事
ツク人ノ歌歌申す事と申す事
キテモ歌歌申す事と申す事
芭、おちて不节歌歌申す事

主玉月廿一日
芭蕉

三

第三
第六十

松之孫

○
秀貞翁仲翁のやうがくの
しくは往々とく教り事で
かよむとあらずよとも急處
も言ひてあらう覺えども教
すれあれあゆる行蔵はせん
しの後とぞゑどり年相て季
津のうきの孫ひばり松
姫もう孫子を端といひて
すもく姫すやろしのせん
一そ理で唐へんとよつて
能松とぞいひて松也
もううきえすとちととす
とおめすがわい

六月廿六 桃島

松之孫

○
ちく四五年中とてあるよ

先大娘むきをもとをあひを
いゆ
文と七百字その状を主張
せんとまんくもあはれあは
せん件を運びて便り不
取く事の多みは無より
この勤を専ねる事せず常
にか勤務あるが爲め仕事す
月半もあらまく仕事する定ふ
ヲ暮れてお出で見るを危杜病
アとあたおもひ入
一ゆふやうひふうも秋をも
のめうづうひふうも秋をも
も言ふやうひふうも秋をも
室に掛ひ候さん大娘もけふ
トさん八合に併せたまひておま
のうあめと立冬を度すておま
のうあめと立冬を度すておま

松之孫

さとくの風を月を伊達をそぞ
者向ひすうて盡首に

ものもやあゝやかまほ保手
きくのあへかへく代の男う
びせし事の事あらまゐる

いまく白仲教室の代久義藏は
くじよれ立え延高のうを

う無肩等の前立つまゆ
ええあをすうすみす子海店

え移ちやすとよりうえ
え伴母を長老店をもむを

ツシムモロク子湖秋の集が
修がたうえ元の能世を

ねどくわくの極端とゆ恩
せきすとゆきよとくわく
ゆくとくの極端とゆ恩

とく色めふくううにあ集たす
りくわく上方能あ中庸居

ねどくわくの極端とゆ恩
せきすとゆきよとくわく
ゆくとくの極端とゆ恩

かのミノ耳古鑑本御へせき
ゆくとくの極端とゆ恩

ゆくとくの極端とゆ恩
せきすとゆきよとくわく

ゆくとくの極端とゆ恩
せきすとゆきよとくわく

○
松風樓

松風樓

主義

育十九と仲夏上船とおて幸野
島の内と百二十里は内舟十三

里を走四十里ありの後七十里西テ
ゆくとくわく

既の故セツ船門 西房 坂治

義理九

三二

さともの思ひ月を伊勢まき
者もへきてぬ肩に

もの思ひやううやうす佛を

きくのやううやうす佛を

びやうす佛尾を出

いまく御教室は代人蔵

くの生れは久遠のくじ

うお首はゆく筋

ええあお子すまう子海

え絆地を長き店をもす

きをゆく子湘秋の集

修がたうえの能世

りそよふ上あ能てすよ浦

そ色めふうるいあ葉たす

ねとえぎくわく松浦てゆ恩

せきすくともきくとくとく

ゆくとく松浦御世傳音上

てとちゆけくひ急

六月十四

吉義

秋風篇

○

よしアノ主君よお茶年老ん
舊河原うそとよひうつてゆ

峰 布田 布引 箕面

古坂十二 雷義坂 美坂

松女坂 信重石坂 忠度坂

敦盛坂 人唐坂 通盛坂

松尾村也坂 船中前司室坂

城家左郡足利坂 良将橋坂

船岡山沙坂

峰六ヶ聲引 暗峰 今立森

あ岩や峰 小佛峰 横尾峰

坂七、船坂 踏坂の坂と坂

う時坂 う乃坂 不動坂

鳴生坂

峰峰六ヶ不見山 安藤嶽

もるせ山 うらふ峰

猿尾山 金子山

山の山

久布木山の山を傳さむ

あ行家山等の字平山打吉上

京山等の山も若らえひまと

あえんくちあつれ坂事と

ひよおこすと鶴名むきすり

すとすひは、峰坂と朱下坂

きみあしまさ不竹の子と経し

大井川の舟遊びはあまへばゆ

さ根根尾山わまほめと

すとす生づるく

五月山

あきや坂

桃青

忠女坂

桃青

の日のとも十方とし、あひうらふ
えすやいからむかひておほきま
て然了さうでまし

一通もをあらわせ、あひうらふ
一茶火危急、地情をよんじゆ
ノル不一筋もあらわす

一通お高麗起立をもはほほうちつ地の
みづく

一通傳すし再今事、うむ力あ
除松のる刪八草子事とすけ
名前も角も一つ事とて有
れあくまでうむぞ

一文考ひ度あ傷勢、傷の寧をま
くす母あれあてたの件へ則
りあくまでうむぞ

支考もおはのほの事とす
ヘ一命終のとすと底事と却
て跡持がれどかのとてを

物見

一二日月日記

伊豆至

一書の事か

田所

一煙本

すず方五

一文考文書入

文書

一文考文書入

文書

一文考文書入

文書

一文考文書入

文書

一文考文書入

文書

の身のとも十才とどもあひうる
えでやうひをもおれどもおほめ
てさうさうすまし

一毛も毛もあつ毛切生もお後難
一茶也危済はれ情あすくとゆ
ジ乳不一ああくとゆ

一毛枯高起ク茶の生辰にうちつ地る
えく

一毛枯ドリル再今卉の盆力底
殊於他る冊ハ草子書シテ
名前も角も一ノ字アヒテ書

え縁七年十月

一毛考は度子の傷勢が寧む事
テノ以あれあしたの件ハ別
かあくすりとちやく

支考もあはの段の事もあ
ト今度の事もあすま却
て絆持れりとゆのく房を
わきくとま

支考

○
き物え

一二日月り記

伊勢守

一著白書印

田所

一煙木

本多繁五

一新或喜入

毛ハ松也くとゆもとと有す事
中空そてうり考はく支考もてま
宮

文家友左木

元年七月十四日　至長安

○

津えきあ強安て魚を鳴
振とも又たまはあめ作事著
つる野の勝於あらわすとす
とすテウサカニシタニ次を度
多キ先使はゆるあつるま
新やもすれあ度すと度
ちくもとひくと自かうカ
度アーラシ

十月十九

桃李

ね尾また生根

新種に瑞と君がおあ

○
虫み草トホクサテウモ
く病くと自生しまれアハ
アマーベルヘリテムシと
シエヌのうちをゆう
しきのふをひきそ

むさんやあ甲ねのまくとす
はるハ實茎簇すてつてキ
白にそつれする全形せよ
たやうにかくはるよ山の
お葉をあらひきうたりス
ヤヒナヒ、ひ色透ともうよ
おまちへ一あまたの合掌
さくやひそく〔中〕青いおもそ
ひそく

平モ

木義

○

皆もとへまめよまくと
さもくとうけよく出事
方あくす

假あくす軍の兵をやみすみ
亭主大きなまうひよされ
あらうらまうとんかく
馬うらまうまねまくとく

チ

毛義

曲あそく

○

主爲主を毫子向魚一翁の身
か志と題詩序を有し強がる
うち鶴子の如きの所あらじ
不思議と云うてやあらむかと
に付し物と約款を言色眼の
音七字をとひせられめう化
は實に能うれすと見ゆる所あら
思白あるも

主の名前を一さんとし
主内ヲ作子一うりを出す
せあくせ難お便くれす

思

シテシテ

乞度

本因縁生

やくゆまく厚ぞよき也(圓)
化年もよきよきも善く
鷺山主ゆめあく嘉好でか
根木のぬけ渡りをもあいと

○

又白魚と中夜の宿於無を
あくよくと

一贈真角先生

故あ裏羽のひ跡すう跡す
きひきと此扇門の紙は已ニ一更
す我輩後をひ後危工房の持
を表持全こよみて墨すあすひ
よとえうじとくと筋くみと
岸信陵扇とすと本因縁の
既終て乃ふ五次翁よりすと
すみす葉すつとすとすと
のうともとく葉とて門人すれ
絆りよ給さんと改すとすと
是をすすりとすと墨不鳥り
矣と一對海りの家とひとあ
褐よギーとすとすとすと
いふふとすと雅の体とれ
之不居のをとれ

うきの御の事をさすられ
外れへいかゞく不思をあ
人達へとちよこむとよ
とがふよまく二村のほりよ
あらまのハ只己うに貨の時よ
ゆのみよしたる海のうみよ
と一歩もぬかじとあくとよと進
くあつよせあまハ力のゆくと
ほりまよのよひて且才モ一品
ををかきくひをだたくひす
ゆれうしゆよへうすと
まゝそよぎへとまやかわくと
おととしあうう猪よ角すと
おの家臣萬門のち音が
おとせせぬの外ともくく
まくまくたまのまひの門の

うみよのうに海のうみよ
きうれとまん天下下す
とまのへとこう取扱を定め
さればあむくまめは前
う面をと改めとあくと
手を拂ひよ拂ひよ拂ひ
とよとよあくとあくとあく
かくよ拂ひよ拂ひよ拂ひ
らんと拂ひよ拂ひよ拂ひ
とよとよ拂ひよ拂ひよ拂ひ
とよとよ拂ひよ拂ひよ拂ひ
下さまえのうみよす
は然とむかひて風ハ海よ
もうかまことひと代えの
集のうに向うに見や船
船を新へと以へのちとす
か彦代を以てまとひとす
を以て易へとおまづきよ

さういふのをよしとされ
あらまほのばとひに貨の時す
あらまほのばとひに貨の時す
一歩もあらまほとひと退
さすすせぬる力のゆゑと
ほのまほのよほに且オセ高
きのとく己の養元は思つて
ををせりぬを教へたくしす
ゆれまほのよへうきと
まほのよへうきと
ゆれまほのよへうきと
あらまほのよへうきと
のりよおへとせりかもひ
おとしあらまほのよへうきと
上のよおへとせりかもひ
おとしあらまほのよへうきと
まほのよへうきと

さういふのをよしとされ
あらまほのばとひに貨の時す
あらまほのばとひに貨の時す
一歩もあらまほとひと退
さすすせぬる力のゆゑと
ほのまほのよほに且オセ高
きのとく己の養元は思つて
ををせりぬを教へたくしす
ゆれまほのよへうきと
まほのよへうきと
ゆれまほのよへうきと
あらまほのよへうきと
のりよおへとせりかもひ
おとしあらまほのよへうきと
上のよおへとせりかもひ
おとしあらまほのよへうきと
まほのよへうきと

おおとくやうて而節の心汗
擇をもとむるほどのみよ
古格をあらへる所とつまも
程歩くふよかに角を以て
劍の葉刀よりうとうとせん
扇田はうきはむかへ角やと
かくの筋りよがくとよ
りまえととくの風原を仕
却あくまうへてま事
さるとゆゑを待す案用
ほんとくのめぐらすので
よ退きぬねをくわづむと
もあくまうとあ東西をもあ
くみをひけとくとくとくとく
ね相手の歌をともかにち
幸よはきを出で事下す
勝先生これぞうんとく事の
丁丑のとし二月の日

彦林吟咏集辨

美なるの筆利と
を傳人の筆集とあ

嘗とく観世恵とあらの風

望

大松もやく盛り付けてある
よ合せるのあら納豆をばほ
うかせめつて

桃石丈

はまち入院はかとあらう松立
並いぬきよしの源司物哀
歌風や只ちくまよひとよ舞

二日

せうり

古風一きに芳らきに市脚をま
ますいとれり

鶴林丈

義

小言を口すに致しはせん二事
やとらきうりし

かけとくゆの体によろしくる方を
取フ

梅石子

七事

枯れや便弱り樹のねをかゝる
音ふね森ちづるく歌の音す

かむねよあくとく歌アス

梅石子

七事

新葉一葉うちしげあくそく
六方うゑすう乳歌アス

梅石子

七事

あお波美

此葉物のねしやく地

芭蕉
片山切美
上ふるまき

雪ふくらみぬの穂のあぢや葉成

みちびくへき達のナリ族のあきを
うやまくもかむあせ一も

をテ
むく起に隠ろがれ身ひの

三月ナニ

七事

梅石子

七事

かき入るあわくすきのあひの
乳音うねよあくすきのあひの

うきうきたれ多くすきのあひの
うきうきたれ多くすきのあひの

梅石子

七事

ニアシの美音る音こひとくとくあく
とむうたれ多くすきのあひの

梅石子

七事

こう梅のかきま井や 五章まくす
うはさみのう 五章まくさみいそ

の上 せまえ

あくまで口上一筋送りトあら
方丈へよろしくおつて

了仙坊

嘉祥の釋尊ハ
諸寺よりまわる

雪あくめまにか納へあつておまき
入せんとくちのそよぐ

おもやとの

今え村ア神のまくら下しゆう古
角がゆうけむかた神のゆゑを
店とうは、おひそかめおとね

おひそかめ

里

文服にへゆつさりとあくまくまく
神おへえひよそはとやしるるほ
きいめくふく

もよ

九石坐つ所

みすすや宿かよろたの、そ處
時あくぬまきゆくまゆ障子をぬ、船と

ゆほり大船寺入院のよーじもくせお
舟此一おもてへとまきのうりわづ

五ノナフ

里

納豆坐ま被つて仰ぎておこなうり
代子相識が事やくおもむれ

梅石坐

里

毛鹿度申は延月のすいふとし用知
経しも含ふる成る

茅宿も高きつゝまくらをうくは
船の轍わづみうなづ魂まづて

五ノナフ

かくまくまくあへねはそくへす
子枝坊へうゆく旅へ

そ哉

ひてもがくうやおおのそくきみと義
はあ甲子のめをめへと高きにまく
／＼往く事と有

三のすすめにておとを郭へとせ
ね柳く木のやまと枝のゆと
ね柳く木のやまと枝のゆと

梅月半やとちねの木の画でりえん枝
うす枝かちふやく又と出あわせし折
やかまれへとすく
あくすみ

青山まつ
うゑすり
うゑすり
うゑすり

武志歌ト序詩ありてわがの歌る
後句の歌ト序詩も是ハ東歌多
尚あるゆきうるゆとなゆるをあ
うやひつ

梅石丈
十弓
十弓
十弓

海うらうとくわはの門へ
梅石丈
十弓

青山まつ
うゑすり
うゑすり
うゑすり

獨く大もてうけく岩を傍
うへれへり

二尺庵森才庵
森

大ね寺戸へと経三百丈とか
と取る方林のうちめつてたり
うれしき先まも山にそむねる事
うすと身ゆる納所へから松よも

うれせれとうづ

梅不よりト

正月

梅の枝は年くらゐあられまつて不知
神かは定法もせう枝既へ拂の形
がくと付の御

梅石丈

七番

八月十三日
八月十三日わよ

八月の社家は清ち候かの改名にて
いと申ゆとやへ一すうや成りりて

冬の月写

梅石丈

七番

めうりとめのども満てたりて
けあくた

四月

多謝はやすと申候おひのむな

すくくうけつるべくくくううの
う

梅石丈

七番

ひき梅相入枝を寺山園中拂
筆う社中申候るあとの神
う右ううひひすて拂是とも
御せうううう申候よ

二月

生泉寺方丈室下

七番

又うううの松

又うううねね木ナ

申候

十一月十日

梅石丈

七番

ゆうとととととととととととととととと
うほくろ八日を延への他、
ふ涉る者

今日國事多忙 旅館外
至多過客 有時風流
之士亦多徘徊其間
予亦不無感觸

拂石子

集林

昔有林中老僧 佛徒
一時入林中作

佛徒之言甚是 老僧笑曰

汝等皆知佛家事 但不知

老僧亦知佛家事 但不知汝等

心何在

近來奇絕不

集林

事上都無一物可為 有時

老僧酒後口語多失今余

詩了

拂石子

集林

身在林中不知身在林中
身在林中不知身在林中

拂石子

集林

蒲團坐於樹下不知樹下
樹下不知蒲團坐於樹下

樹下不知蒲團坐於樹下

後方丈

四

集林

方丈坐於樹下不知樹下

樹下不知方丈坐於樹下

拂石子

集林

方丈坐於樹下不知樹下

今日の日が夜を升、私と流作を
まごひき歩き、すすめから風流
うそすくうれし詠すうのをう
うやれア

萬葉

七

春もおつきゆく拂く夜
一すゝ入あつり

拂きよ石をたむをまく

かやまきのとあひなりきるみまく

森夢まきよりゆひ争大根持
亦あらうくろち方よりまく

正月十日

西幸寺納木

七

事よ起おりに枕する家御義
事活ゆき角樂する只今うぐ東
行ア

拂石至

七

心母さうよたあひせうトケア
そふくまれぬはうの年ア

拂石至

七

時お青山を相へ生立神と争う
村井氏の差ハいともやがむれを
絶て立石

四

七

蒲は彷彿へ拂石殿とあひますう
モ候へゆくやく又坐方へあひてお
車をまめに拂きうむけむる事ふ
悲神を笑う

六月ウ

拂石至

七

右萬葉詩種持 石木 喜成

まつりひのうやく〇入

ハロ

楠石丈

義

おおなみすまへ並様づけ一わ
進ふるふゆ

義

あはままた休む

義

すよ候ぬまのゆくらや度量を度
國歩をたせむとぞも付てす

義

万葉を度すかとぞも付てす
うや越後吉野山ゆく

義

楠石丈

義

お年持のれ楠西多喜す
の候きの事も第

メ

楠石丈

義

手古跡かゆりはおとせす
連ひ中守身たよろしくお

メ

楠石丈

義

楠石丈

義

篠のえ叢代高ちう旭家を叢
山庭のつゝ草す中明ほるの事
もとめのゆくるお

首よし

義

未だも浦詰りゆ度量を度
市詰すよりも度量を度すには
入院契のあたたかうぢりすと
まんじゆ詰も事とは度量の事

二方よし

義

写されど事度量はほせ
う事とて改めて度量の事
すとこしてお

義

千葉を下戸る事度量は
あちもきもいのすとゆきの事
ゆきの事とて改めて度量の事
すとこしてお

義

先づかせし。あれの風が来時
小水立る。當日御て梅を
うきの下りて

八月二日

吉川老人

竹葉のさすれ中は小刀うち
き

竹葉の一束の竹下へ厚い竹
をやく

おのやすむ。素のみ一筋のす
あ／＼や一升とうらもと／＼や
か／＼事あくわづ

三日

梅雨経

森

聲面とふあとをととの市森

門松はまどり、ああ、もみ
もみ強く森をす

桜月廿日

聲面とふあとをととの市森

十一月三日

雨衣雪を歩むゆきを攀へて森

十二日

雪たぬよ不破の園より人をそ

森

三日

森のこや／＼枝つる林の森一枝

そのううう／＼ふゆうう林あざれの
えとれづづく

三日

森や／＼せよ若やさりん作瓦 木森

梅の枝をあれとこわれさるおとせ
えがハナう／＼木とまとの山に酒を

三日

梅の枝をあれとこわれさるおとせ
えがハナう／＼木とまとの山に酒を

三日

梅の枝をあれとこわれさるおとせ
えがハナう／＼木とまとの山に酒を

三日

梅の枝をあれとこわれさるおとせ
えがハナう／＼木とまとの山に酒を

吉川又郎

森

竹葉のさすれ中は小刀うち
き

森

義

山に上へ移りてすしは虫を食ひ
うらかあはくよきの清めの
よどもやれり

梅石丈

義

山に上へ移りてすしは虫を食ひ
うらかあはくよきの清めの
よどもやれり

れり

是

義

ぬれ糞をすねまつるをなすを糞
そよふわやわんねの糞を糞

ぬ味あるじに一疋送り下を糞
有ちて面糞でやうと

十日

智者老人

義

文院す。危知来高の宿り一舍
立教す。承教神

梅石子

義

萬秋はまく難がます。而く
うむ。万葉中葉一枝りふ
うむ。

梅石子。二人の店を。と若

役の母をひく。あくとまく。全

和坐本と本とみつ野糸ふ井
うしけをくも

義

みちのくあのふねれ石を福島の
旅まへ東一里半。わう里人。ま
つえ渡東の人。むきよ。まく
て此石をこうみせゆ。とにくを
この石よ。度して入野す。とくんの
か。もてひ下さずまへたて

小春節後何やとおもへよ
坐ておひまうへりあかへうを
うよ

久八首

春

物おは詩かの風る事す活潑な
たわわやしゆく事くされつ

梅石丈

春

墨葉とて葉葉とて、春紀葉一
葉年され、暮の日

春

二井ち詠焉そむきあめ家梅
とすすすとすとすれむ

梅石丈

春

先とととととととととととととと

梅石丈

春

二井ち詠焉そむきあめ家梅
とすすすとすとすれむ

梅石丈

春

あ出た、見三月

梅石丈

春

松草ナヌ并や一葉一枝うきを角

梅石丈

春

春川八葉はすゑかな松まう春

皆文若はぬれの木下アミアシスホ

西の木の木の木の光浦全美寺

宿泊日は未次第アミアシスホ

主も未第ハム出でまう一比段やす

梅石丈

春

みん一野子號十メ達トカニモ

モ画うれす

春

小を即發何やとモヘヤシテ
坐てこすとモテテシカハ「うき
の」

肩三

久ノ音

立聲

物おハ殊かニ風も空も皆極まな
たされ乍レシゆる中ニテ取ア

梅石丈

立聲

墨毫もく煙毫もくして、此筆一
製矣これ、まのや。

有

立聲

三井ち詠者子ひよもや家傳
三が一すうりこー

先君もそぞ應ひ立毛毛れアリ
而ともゆる歌入アリ

志士ノ音

立聲

本出だ、毛ミハ

乃ううとさくヨヘのゆる思、ト森

春水もあ事、ドレテ松方山の案
換へ下、のうやウト

梅石丈

立聲

松草十支、手一茎、毛モ角
角、次實アセウア、アホ

梅石丈

立聲

玄門ハ美也す、毛モ角、毛モ角
角、次實アセウア、アホ
の實日ニ來、次實アセウア、アホ
の實日ニ來、次實アセウア、アホ

角、次實アセウア、アホ

まよすとおはなを前にて約束を今法
を定め候るも及延引りて本日吉
と申候候るあらせやう

八日

梅石子

口上

まよすとおはなをひきとひよる相識書

かやどみ

口上

まよすある竹の手こか送りをかわ
あくを画こう札アヤシム

か。

蜜林より

ゆゆす店の事で候すり
さとしとす

青苔やみすく芭蕉一株二株

既至く

毛糸

芳艶すそひたゆきの那 そ落

口上

休艶くまみ野う手よとく 狂歌

秋明吹う事ノ不

もよ

もよ

小念ゆうて附ゆあひて

寛ふ末そかとあひて改時也 そ落

返す

过古の事出るをされどす ほが
信の致へば何うか ほりあれ

へくへくへづけたかさうす そ
ひへゆるもよろくうせ

梅石子

毛糸

十二月二日

毛糸

旅の宿林立高き山の太工間
木屋とあへてす一すう軒のやうに
おちつて

室

一筋の肉を、おな、前筋で
うしれりて

おちつて

圓にたむるようすへや、やま
も風流よし、くらう肉をま

うしれり

峰もさもさも出立段をかえ
ありて延ひやり一すの事と
うしれり

うしれり

かう變峯とてまくわらう
けあくさんもんやとまうれ
のやしゆ

梅石丈

肩

峰もさもさも出立段をかえ
ありて延ひやり一すの事と
うしれり

梅石丈

十二百四

壁の上の成りてひつきやうり
ゑね、せんぐく、出立段をかえ
梅石丈

うしれり

壁の上の成りてひつきやうり
ゑね、せんぐく、出立段をかえ
梅石丈

梅石丈

特の肩のたゞさうんの筋をか
えりて圓を交み、ちまき抜け井や
手折れをあらき面うれりや

梅石丈

そめ

柳柳歌を重複

青柳の歌をもす佛ふるそ哉

葉白い臘の見の画譜

ツモレくごく起て見る歌の雪そ哉
歌う

梅石丈

そめ

その邊に御宿のすゝ日出が
あそち一まふみあきあれり

雲光寺庭翠波流一今其
いと種すやアキタケセ

高麗の地秀半も月とうけと承
をくわうよの高麗月とくわく
れで

梅石室
ノツ

御井より一わまつのうか
此おこしとてはゆ

梅石室
ノツ

御井戸へとあつてはうせ栗
ニエキモキモテアラホア

里
ノツ

へどのすあるそくめん十みさ
しけあくなくまがくへとうく
れり

梅石室
ノツ

久ちんにやの佐物をも
梅石室
ノツ

山角

葉竹の本物ゆきうきてす
鏡山坊とおどすのあらうすが
承安院

梅石室
ノツ

梅本氏吉生ふけぬお死云の
延承

月永は何んをかくそく
は

あやめの葉をそちまたさ
筆二羽送る、あはくま西

うれのや

十六月四日

喜茂

雪をまつ馬玉をまぬ我がも喜茂

喜茂の山のあまき一すらおうり

まゆよ

喜茂

むく風のあまくおおらかと詠歌おと
りやつてはまむけんとめをあれど是
かはやしせんとめをあれど是
かはまようまつあくねどすみる

ヤハニ

喜茂

たち馬の夜

喜茂

神かまふ事も甚うるえくうけく
まらわくわり

橋石丈

喜茂

そ後てまくら波よすかでまく
船で出来次第さきうわ

六月四日

橋木の

喜茂

月

かくまくまくまくまくまくまく
あくあくあくあくあくあくあく

橋石丈

喜茂

そほのへばまくまくまくまく
あくまくまくまくまくまく

橋石丈

喜茂

ゆくまく角のまくまくまくまく
あくまくまくまくまく

橋石丈

喜茂

まくまく角のまくまくまくまく
あくまくまくまくまく

橋石丈

喜茂

序を一説、亦居て其の下に

されれ入る

梅石子

七萬

晴らす居て夫主へ書く爲や

さきうり

梅石丈

七萬

予がも御本多くうほ紙子の
誠てう牛乳の

梅石子

七萬

初めにナヌ秋下るかみつて
あま玉浦へまおこしきけ金ふ
うり

梅石丈

七萬

辰風緋出事役者有りあキ市
あくよそすのアト有

十月八日

梅石丈

七萬

お乞神、數る事なる程も申る
着三々せ常とやむとようこそ
うけ御も二方そつまふと
申す無計 未被滅

四月

四月

予のぬけどうへあると便ひ載つて
お某近身うきうり

梅石丈

七萬

先々くう子をう跡付不等ひよく
う往る所とお入

梅石丈

七萬

一候り夕ゆきやん不詳下はく人
あちあるうけと有聞のと申すお
よしゆきあてのりへおおこうと
と有

梅石丈

七萬

ひるまくすきよはの隠れと舞
泊港を出ず千葉一メドモラ子作

いわゆるきあ木下のまく

金一木うく移つ

梅石丈

そ哉

うき化くかもひ十数年あふと一二
うらへゆゆかくほく

梅石丈

そ哉

大井玉さうとひし考村差
れまちくうけ

梅石丈

そ哉

かのとみうきつけん

梅石丈

そ哉

まそやゆくもあ一まそ不思
事と

梅石丈

そ哉

森平山うきの木く爲すよ
めりあんづく

梅石丈

そ哉

伊之高麗む的くせじと
の段とくら試弓えぬまうひ
うむるあくべく

梅石丈

そ哉

新茶を升美不け一茶四母
こまう進すくあくれ

ズ

し月すす

第廿五

三三

御の事は事あ無一物くも第
津向け難か好樂つまむとし
度りとおもひゆひすむ

梅石文

七

口上

生る事ある此をキムトマ
カムシテモクルタメ移入
也

也ほくすく聖とくすく方と圓
度を今聖誠も一白きや
未破滅也

七

生る事あるとくもかくみ御よう教
あらじ葉が波みくも承取

梅石文

七

むうすれ壁ニ引くすく
方丈へまうすく教へ
也

七

きみすく櫛よくすく詠歌も哉

文政御年少の大坂へ立事と取
角も時も船木立同内可う

波と山里也

七

石村はすくひやくとも海つ
くすく海くろう御城へきやくと
かへきよ

口上

尾毛やへたまうすきり今も也
來ひづ

梅石文

七

物はは山も本状萬手發へせ
玉あく松ハ仙林坊もすめん集
えどり此をもきわへ

梅不丈

そぞ

假り山入東和為、そぞうあはく
あゆみ一ありゆひおほうの海、轟
と轟々々々

そぞ

万を重りてめぐれ、そぞ及為、
此葉子すあうきくはすうり
ひりくらづ

梅不丈

そぞ

もがのねひきかずす
括りそあおむく
おへ思れづ

極へく月生えねのみづかす暮

一轡りハ底根萬葉陰もすと
種蒼脚や極方へ事すとむ
幸中也猶るハモキトとむ
降らし翁の詠歌是へばう歌
音角は度ヤ一入の上

うる
梅不丈

そぞ

もがのねひきかずすと承ふく叶
へのまゆうやまづ

梅不丈

そぞ

もがのねひきかずすと承ふく叶
寺入院の候はうすすく承五こう
度りふ高飛勢

ひこ

五月十三

梅不丈

そぞ

うちやとのうすく流れやあすて能
をとうりと承めつてさるのよ
音織を

ほ

のほす你一會うれとまかずく
うふうけのむく

梅石丈

毛叢

ちま紀を説矣すんらうみすらきあ
あく肉食へかうしくおつ

梅石丈

毛叢

ひととくものせんくしまのたのうり
かじひしきとそえ教えや

梅石丈

毛叢

菜屋千ちうひえうやく病あ病
血門へきハ氣る送りうよと
すくらきの経あつて

五月五日

毛叢

四月五日

毛叢

毛相も病人のうみの居業も此

痛がもがくがく取つて

五月五日

毛叢

梅石丈

毛叢

淨土寺入院次第時も一乞うり
この付の静山後れうつ所

十一日

毛叢

留候も大雪見立出立及

延引の事も御てと青葉落

うへ來行つて

毛叢

四月五日

毛叢

久ハ雨うをさくわくやうゆの度り

ハ雨うのやうに猶かあくとくと
うり

毛叢

やうきおこやくはくとくとく

おう

梅石丈

毛叢

く

梅石丈

毛叢

梅石丈

毛叢

梅石丈

毛叢

總てを一筋もその手にまか
未だ一人もあらずされ

年々歳々裏紙一束年々一束
未だ未だ未だ未だ未だ未だ

楠石丈

毛茶

乙

年々歳々裏紙一束年々一束
未だ未だ未だ未だ未だ未だ

九九

毛茶

七脚と樊像として根井みこの
むら一枚また下さりけふとく
因む友とし

山村の内風との

毛茶

乙

おきき女改名相處事とめとく付
く水

乳母まで達むとそなめ毛茶

乙

四角宋へ西用をまかへ一會のり
既度まがくわすれつ

みる

毛茶

小楠一筋うき下るを何よても
毛茶のハラヒラヒラヒラヒラヒラ

楠石丈

毛茶

四角宋へ西用をまかへ只今
四こへうりくつ

乙

乙

宗吉改て舟うちの船をもねむ
すくるゆるねく内形うのゆ

十

楠石丈

毛茶

毛茶をもねむる打うちれの
乙

楠石丈

毛茶

總てを一筋もその手にまか
未だ一人もあらずされ

毛茶

總てを一筋もその手にまか
未だ一人もあらずされ

毛茶

萬葉集一卷のその下ノアミナ
シテハリハトモアレタ

七

楠石丈

毛成

二

年少歲シテ家儀紙シテ來毛シテ年シテ一
翁シテ來毛シテ年シテ一

也力

毛成

七叶シテ家儀紙シテ根井シテ又シテ之シテ
又シテ一枝シテ下シテ一シテけシテ毛シテ
因シテ也シテ也

山村シテ向シテ翁シテとの

也

毛成

おきき女改名胡蘿シテ重シテめとシテ付シテ
之シテ承シテ

乳母シテまに達シテむシテとシテねシテのシテ翁シテ也

以上

四物宋シテ西背シテ主シテ一シテ今シテのシテり
既シテ主シテくシテりシテ於シテ之シテ也

也

毛成

小物シテ一シテ翁シテ下シテ主シテ也シテ也

之シテ毛シテ之シテ人シテ主シテ也シテ也

事切參りをきくやうる十日又まい
うとうと只今來れ

五十七

海かね野原の内ノ事と申れ
神

梅石丈

手足寒いそくくあくはほりち
腰きこり腰きこり

梅石丈

梅石丈もひきあうて口に
みらし肉を手の下に持つてつけ魚

牛とうくう坐ては腰痛つ

十日

小薦めのゆう易き画で

青石丈

腰きこり腰きこり腰痛つ

手足寒いそくくあくはほりち

梅石丈

腰きこり腰きこり腰痛つ

梅石丈

腰きこり腰痛つ

梅石丈

腰きこり腰痛つ

梅石丈

腰きこり腰痛つ

梅石丈

腰きこり腰痛つ

梅石丈

腰きこり腰痛つ

梅石丈

五丈

身付九

事切身をきりやる十日又まい
うつとうを只今れ

王十七

海かね御度めりゆくと取れ
波

手の事へそりくあくのほるわら
波をうけし出本次第れ

王廿

橋善信もたまくあくやく口に
みさし内に余りのよち障つけ並

王廿

シトウくう坐はて波打つ
十めり

王廿

小島めのゆう鳥も西へのよ
青山

王廿

いも既七ツもう只今うこへおア
浦へちう七ツわすよテヌツから
ニヌミトメ

王廿

店八猪用ひ
使ひて就御事すゆくゆく時す何

王廿

うるはく旅行波ひ切る袋ひ

王廿

ぬりうすもまゆうひ、波すうう
手すすむ入れ

王廿

舟十日

王廿

知海坊ルト

王廿

春の春葉うすく形く扇内乃ハ
「詠歌」て手西医方丈へれ

王廿

久ハ底ニ付シテ人を殺スル事無
引ヤセシく亦有

カル

林石丈下

不義

主の後事アリ酒が止ムラセ
ウマリテ入

大雲ち納和

不義

鬻先も當キ物か見ムヨリ
度ナシトサヘリトモツラ者て
財あわせられテセシトナシ

妙法寺藏絵の画アヤトとモ蘇
形ちろひヤ出ふまシハシ
ヨウナシタマタシタマタシタマ

比武子モ改申ムニシテ
此お主角併セヌアトクヤアシ物
朱ツアリの事ノモナシテ少シ

ナリ

十六文ニテ

八文ナシテ

栗二枚が厚尼ナシ下市

ヨウタレタれ

ナリ

ナリ

ナリ

あ。

うへ爲了せりや人をうけにるは
引やぢくある

たる

林石丈下

名義

走ひ處が多う酒がて只今ま
のうりれり

大雲ち納ふ

名義

新見重寫きあはか見るのよ
音うるやむりとひすゑる
二十九の村山（まほら）あうや
す一絃（いん）ひりとよりうう者で
詩があやうれす（ほづうれす）
言葉

妙心寺義教の画（が）とよも蘇
形（かたち）ひやへ虫（むし）よみが
よみがへる（よみがへる）

此代子そひゆうぬひうす
時おも角（つの）せせらうとくやうゆ約
朱（すみ）ううりのまくらむうゆう
り

九月う

弟（おとこ）高麗（たかくに）ううてお猪（いの

いの）ううも和（わ）うやう付（つ）あまされ

十六文うう版

物

高麗

佐伯し人ひりのゆづやには便ひ
セナ 楠木よもを成

文郎が金と交はれと目出たにあ
佐く赤坂一キホアツ

すみ

佐伯し人ひりのゆづやには便ひ
セナ 楠木よもを成

楠木足

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指

あく通只今うそー船のツ

底方半つ底てやく人盛てくちあ
ひりてあとあく西あらか方へ事
う方ほほるの段とうやれの

写

鶴よせられの自画

鶴鶴の足りとかわく 楠木家と義経

青のアハ あからけの板

とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

写

鶴よせられの自画

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

楠木足

写

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

写

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

大和音

大和音

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

楠木足

大和音

青のアハ あからけの板
とくふ一丁味師少くとも 指
あく通只今うそー船のツ

次大寺

大和音

はと

事あらゆの物を空に遣へせり事より
文書のつきをうかがひやまく人をす
いやうのぬまうむうむうむうむうむ

トモトの
梅石
木

皆もあれぞ松(落日なまう)と義
義み金牛むきむき金牛只今うこ

したつ
梅石
木

時よりハヤ船根院をやまととう
爲シヨリヤハ小ゆる義み留
メテ船ア

一時もゆき高麗舟園(紀伊)
木

はと

神が取立たる
三

青山は戸へ移出す一色山
波根アキミヒトシ
木

はと

井のつ、桶岩レドムハ種とま
く紫のゆるやかな
四。

政のく籠井思立す自知安
安く時計かはすすむるまく
も振りうれあくつ

十月十九

鳥よ

(事あらう代官ふるや我意しやう
弓造作、あうのととおひねね
うううううううううううううううう

老ハ庭

木

首よりまほのあまみかを
風味ありて甘美也すま
すれり

梅石

糸

小野もれいと二年下
かくすあふる春ふる季
かくすあふる春ふる季

梅石

糸

大坂すう色わゑくすう大松
寺へむせり

梅石

糸

浦ふゆ路へ高ひめおれり
木取山越へ
歌つてゆ

梅石

糸

脚み月迫りせきある此虫
はのへたす尺半れのつよ
十二月立す

梅石

糸

蟲多きが候うても一對相
共送了却するもよされす

梅石

糸

蟲多きが候うても一對相
共送了却するもよされす

梅石

糸

蟲多きが候うても一對相
共送了却するもよされす

蟲多きが候うても一對相
共送了却するもよされす

梅石

糸

蟲多きが候うても一對相
共送了却するもよされす

梅石

糸

۱۰
۱۱
۱۲
۱۳
۱۴
۱۵
۱۶
۱۷
۱۸
۱۹
۲۰
۲۱
۲۲
۲۳
۲۴
۲۵
۲۶
۲۷
۲۸
۲۹
۳۰
۳۱
۳۲
۳۳
۳۴
۳۵
۳۶
۳۷
۳۸
۳۹
۴۰
۴۱
۴۲
۴۳
۴۴
۴۵
۴۶
۴۷
۴۸
۴۹
۵۰
۵۱
۵۲
۵۳
۵۴
۵۵
۵۶
۵۷
۵۸
۵۹
۶۰
۶۱
۶۲
۶۳
۶۴
۶۵
۶۶
۶۷
۶۸
۶۹
۷۰
۷۱
۷۲
۷۳
۷۴
۷۵
۷۶
۷۷
۷۸
۷۹
۸۰
۸۱
۸۲
۸۳
۸۴
۸۵
۸۶
۸۷
۸۸
۸۹
۹۰
۹۱
۹۲
۹۳
۹۴
۹۵
۹۶
۹۷
۹۸
۹۹
۱۰۰



